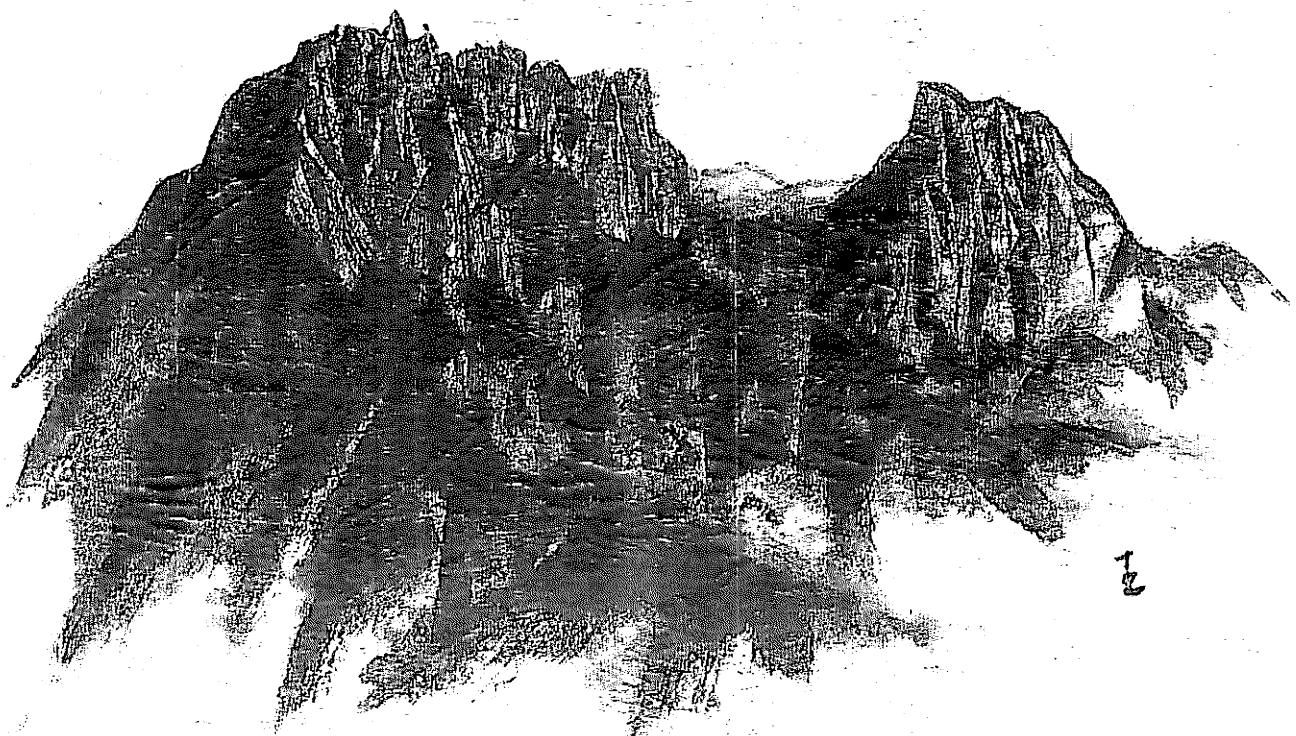


佐

後



信州大学長野山岳部

歩み

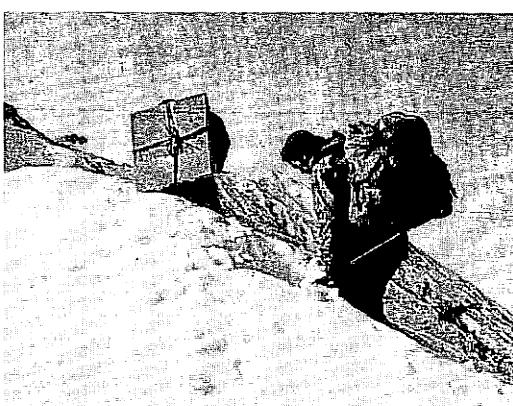


八方尾根の
清水悟郎部長

1954. 3



志賀高原にて 1955. 3



前常念へ 1955. 1



均子岳にて 1955. 3



常念岳にて、新人合宿

1957. 5



夏山・出発を前に沢渡

1957. 7



明神岳にて

1958. 1



槍ヶ岳山頂にて 1955. 10



北穂高岳山頂 1958. 8



入山を前に 1960.7

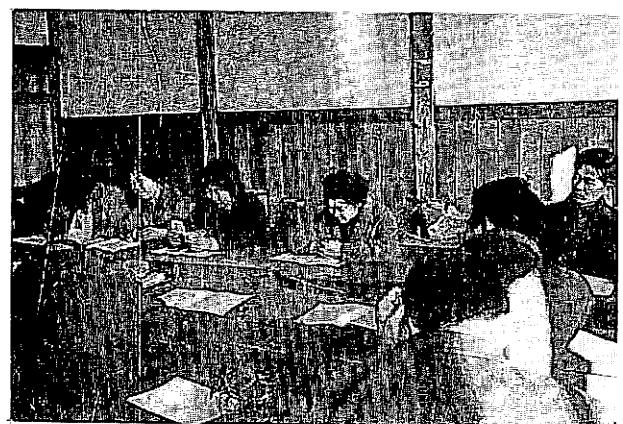
馬場島にて 1964.7



春山のスナップ

1959.3

部会スナップ 1959





尾崎喜八氏を迎えて——文化講演会 1960. 9

トレーニングを終えて——工学部にて 1960. 3





涸沢定着秋山岩登り合宿を終て——上高地にて 1963. 10. 9



岩登り合宿
——物見の岩にて

1963. 6. 29



夏山合宿南アルプス全山縦走より
——甲斐駒ヶ岳にて

1963. 7. 25



明神レリーフ前にて

1965. 3



冬山合宿

1966. 1



遠見尾根B Cにて 1962. 1

南アルプス光岳にて

1965. 7



はじめに

百瀬 斐敏

信州大学長野山岳部の活動を纏めるという。仕掛け人は勿論田島守氏。長野山岳部創立の立役者である。部活の内容は本文中に、年代別に述べられ、長く部長をされた清水悟郎教授（故人）の「思い出」と部員であったが故人となられた岳友たちの思い出も語られている。

長野山岳部が、松本山岳部と合流して信州大学山岳会となり、長野山岳部OBは信稜会と呼んでいたが、全信州大学山岳部OBを統合して信大学士山岳会となって久しい。今更、長野山岳部の活動を纏める意味はなんだろう。老頭模糊として、意味不明のまま時が過ぎた。

松本県の森文化会館で、第5回編集会議兼作業に集まつた、信稜会亡靈の会員（血も涙もあるオジサマ、オバサマではある）の凄い熱気と真剣な取り組み作業に、私は驚かされた。何が会員をこれほどまでに動き動かしているのか。それは、腐蝕する日常性の中に埋め込めていた青春の香を、その花の中に見つけたからではないか。花は中沢君が遺した部の記録集である。

中沢君の死は強烈であった。教育という名のもとに、その若い全生命を投げ出したのであった。花火のようなひ弱な終焉ではない。二十六歳という青春のすべてを凝縮して、計り知れないvoltageを包んだ死である。そして、彼が、最も大切にしていた散ることのない花が、山行記録であったのではないか。この花を核にして、会員が、今はなき長野山岳部の碑を編み、中沢君の靈に捧げるrequiemと考えたのであろう。

また、一方、名利功名、損得利害を全く思いもしなかった純粹な（純粹とは青春の別名である）時間を己に取り戻す情熱（情熱は青春の特権である）を送らせているのだ。こうして、すでに消滅したと思われた亡靈信稜会は見事に息を吹き返してここにある。

会員諸兄姉が、どんな碑を成し、どんな鎮魂の曲を奏するか、今は見当もつかないが、すくなくとも、半年に涉って田島氏と共に取り組んできた会員皆さんが、何ものにも変え難い青春を満喫しながら、もしかしたら他人には紙宵同然かも知れないシロモノに、意義や打算を減してもり上げた部誌は、必ずや会員の珠玉となることを信じよう。

そしてまた、これが契機となって、今、在ることの幸せを謝し、友に謝し、青春の山へ足繁く出かけることを、切に願って止まない。

目 次

| | | |
|--------------------------------|------------------|-----|
| はじめに..... | 百瀬 斐敏 | |
| 信州大学長野山岳部発足の経緯..... | 小柳津次清 | 1 |
| 1953年度の記録..... | 田島 守 | 2 |
| 1954年度の記録..... | 坂井 靖 | 4 |
| 長野山岳部初期の山行..... | 百瀬 斐敏 | 13 |
| 1955年度の記録..... | 吉澤 健 | 14 |
| 1956年度の記録..... | 久保田 寛 | 23 |
| 1957年度の記録..... | 吉澤 健・小林 盛男・河口 歌子 | 32 |
| 充実期をむかえて－1957年度夏山アルプス全山縦走を中心に－ | 吉澤 健 | 48 |
| 1958年度の記録..... | 柳沢 勝輔・宮下 常子 | 52 |
| 当時の炊事と食糧..... | 柳沢 勝輔 | 69 |
| 女子部の山行..... | 宮下 常子 | 71 |
| 1959年度の記録..... | 柳沢勝輔・中村和美 | 73 |
| 新人育成と監督制度の制定　－歴代の監督－ | 吉澤 健 | 80 |
| 1960年度の記録..... | 大西 道夫 | 82 |
| 充実期をむかえて－その2－積雪期北アルプス全山縦走－ | 大西 道夫 | 97 |
| 1961年度の記録..... | 大西道夫・栗林紀子 | 98 |
| 信州大学山岳会へのステップ..... | 大西 道夫 | 117 |
| 1962年度の記録..... | 下倉 邦夫 | 119 |
| 1963年度の記録..... | 下倉邦夫・中村元子 | 127 |
| 装備について思いつくままに..... | 町田金四郎 | 136 |
| S 32, 3年頃の装備のあれこれ..... | 小林 盛男 | 138 |
| 女子部の装備..... | 大塚 寿子 | 144 |
| 信州大学長野山岳部の海外遠征..... | 下倉 邦夫 | 146 |
| 1964年度の記録..... | 下倉 邦夫 | 147 |
| 1965年度の記録..... | 望月 映洲 | 163 |
| 1966年度の記録..... | 望月 映洲 | 186 |

<追悼の部>

| | |
|-------------------------|-----|
| 清水悟郎先生－作品から－ | 215 |
| 一追　　悼一 | 228 |
| 百瀬　斐敏・田島　守・吉澤　健・小林　盛男 | |
| 滝澤　歌子・柳沢　常子・阿部　紀子・堀内　芳次 | |
| 閔　　義臣氏 | 243 |
| 水科　　信氏 | 245 |
| 中田　邦夫氏 | 249 |
| 中沢　俊夫氏 | 253 |
| 片岡　格氏 | 257 |
| 小穴　自成氏 | 262 |
| 津金　周子氏 | 266 |
| 三石　紘氏 | 269 |
| 山形　文武氏 | 271 |
| 柳沢　進氏 | 273 |
| 小川原五郎氏 | 274 |
| 加藤　一作氏 | 276 |
| <消息・名簿の部> | |
| 消　　息 | 283 |
| 名　　簿 | 293 |
| 編集後記 | 297 |

表　紙　絵　　祢津　直行
カ　ッ　ト　　田中　哲夫
　　　　　　　塚田　幸子
　　　　　　　坂西　澄子
写　　真　　宮尾　裕
　　　　　　　他

信州大学長野山岳部発足の経緯

昭和28年の新学期、教育学部の中庭にキスリングを背負った学生の姿があった。学生服にキスリングといういでたちは山好きの学生達の目を引き、しぜんに言葉を交わすようになった。信州大学発足4年目の春のある日のことであった。

教育学部には昭和24年の新制大学発足の年に「山岳部」が結成されている。燕岳登山などの活動があった。26年には菅平～万座コースを踏破し、信大コースと名付けられるなど意欲的な活動もあった。(「学窓そして30年」より)

しかし、その活動もこの年かぎりで「山岳部」はしぜんになくなっていたようである。ただ、学部では学生のサークル活動等に便宜を図る目的で天幕などを用意し、希望に応じて貸し出していた。

山好きが言葉を交わす中「山岳部」を作ろうと言う話題がうかんできた。そこで、学部厚生補導の了解を得て、早速部員募集の掲示をすることになった。例のキスリングの学生は教育学部松本分校から3年に編入してきた樋口吉弘であった。松本分校には「山岳部」があり活発な活動を継続していた。(「学窓そして30年」によると、24年小柳津、岡村らが発足させている) 樋口と同様に松本分校山岳部から関義臣、上嶋隆夫ら3年に編入した面々、教育現場から学生に戻った小柳津次清、4年生で松本山岳部出の大村昌也、2年生の中島福男、新入生の坂井靖、田島守、女性の三浦文子らが集まっていたメンバーであった。

この中で小柳津、関は県ヶ丘高校山岳部OB、大村は松本工業高校山岳部OB、坂井は大町高校スキー部OB、田島は長野北高校山岳部OBで「山岳部」結成の方向はすんなりと決まった。4月中旬、募集の掲示を見て集まったメンバーによって「山岳部」は結成された。リーダーに小柳津、サフリーダーに関が選出され、学部への届けなどの手続きをふみ正式に発足した。教育学部山岳部の再出発であった。部員は20名ほどであった。

4月29日、18名が参加して、飯綱山行が行われ、これが第1回の山行となった。早朝、学部から歩き出した日帰りの山行であった。この後は教室を借りての部会や何とはなしに中庭に集まって情報交換等を行いお互いの理解を深めた。そんな中クライミングの技術を身につけていた関を中心に「物見の岩」でザイルワークの練習を始めた。ほとんど毎週体力作りも兼ねて物見の岩に通った。関、上嶋、中島、坂井、田島らが熱心であった。

この年は5月6月に美ヶ原山行と「大文字岩」「烏帽子岩」でのクライミング練習を行った。それぞれ10名以上の参加者はあった。夏山は槍ヶ岳北鎌尾根から穂高岳縦走および槍

穂縦走と涸沢定着合宿をもった。参加者は6名だった。積雪期の山行は「部」としてはできなかった。秋以降は個人山行だけであった。

翌29年は、やはり松本分校山岳部でリーダーをつとめ、松本工業高校山岳部OB、北穂会員で教育現場から3年に編入してきた百瀬斐敏をリーダーに迎え、久保田寛ら工学部の学生も入部し、「長野山岳部」出発への礎となった。また、清水悟郎教授に部長として就任していただき、歓迎山行、夏山、秋山、厳冬期、春山と大学山岳部らしい活動が始まった。

この年の夏山縦走中、北穂小屋で松本の文理学部山岳部の一行と出会い、懇談し合同の山行を計画しようと話し合った。が、30年秋山合宿中、松本のリーダー平沢氏が遭難しこの話は立ち消えたが、後年生かされ信州大学山学会の成立へと発展していった。

(小柳津次晴)

1953年度（昭和28年度）

○山岳部発足顔合わせ山行

- 飯綱山登山
- ルート 教育学部校庭～大座法師池～一の鳥居～山頂～同コース下山
- 4月29日 早朝校庭を出発、夕方帰校。
- L 小柳津次清 関義臣 大村昌也 上島隆夫 樋口吉弘 中島福男 三浦文子
浅野井哲 坂井靖 田島守 柳沢澄子 中条嘉代子 渡辺糸枝 丸山 飯島
他2名

和気あいあい、楽しい山行となった。

○美ヶ原山行

- 5月16日～17日
- L 大村昌也 上島隆夫 樋口吉弘 中島福男 三浦文子 田島守 浅ノ井哲 丸山
渡辺 飯島 他
- ルート 長野～松本～里山辺～三城牧場～小広場幕営。小広場～大文字岩・クライミング～王ヶ鼻～王ヶ頭～武石峰～山本小屋～白樺平～丸子～上田解散。

大文字岩で時間をとり白樺平到着が遅くなった。

○鳥帽子岩クライミング

- 6月14日
- L 上島隆夫 中島福男 田島守他

- ・ルート 長野～松本～浅間温泉～浅間峠～烏帽子岩・クライミング～浅間峠～松本解散

○夏山山行

- ・槍ヶ岳北鎌尾根山行

- ・ルート 大町～葛温泉～湯俣～千丈沢天井沢出合～北鎌沢～独標～槍ヶ岳～北穂高岳
涸沢～横尾～上高地

- ・L 関義臣 小柳津次清 上嶋隆夫

- ・7月6日～9日

夏山の偵察を目的とした山行だったが、北鎌尾根を登った。

- ・記録

6日 大町～葛温泉～湯俣～出合幕営

7日 出合～北鎌尾根～独標幕営

8日 独標～槍ヶ岳～槍の肩幕営

9日 肩～中岳～南岳～キレット～北穂高岳幕営

10日 北穂高岳～涸沢～横尾～上高地幕営解散

梅雨時であり悪天候が続き非常に厳しい山行だった。夏山合宿は別コースに決める。

・夏山合宿

- ・ルート 大町～葛温泉～湯俣～千丈沢天井沢出合～東鎌尾根～槍ヶ岳～北穂高岳～涸沢～奥穂高岳～前穂高岳～上高地～松本解散

- ・L 小柳津次清 関義臣 上嶋隆夫 岩垂俊雄 中島福男 田島守

- ・7月25日～30日

- ・記録

25日 全員大町駅集合～葛温泉～濁ノ小屋～東沢～湯俣、露天風呂で汗を流す～千丈沢天井沢出合幕営

26日 晴れ 出合～北鎌沢～水俣乗越～槍ヶ岳肩、幕営準備～槍ヶ岳～小槍取り付き点～小槍登攀～取り付き点ここまで戻って日が暮れる。月の明かりでルートは分かったが、戻る途中月食となり暗くて危険なので、声を掛け合いながら慎重にテント場に戻る。

27日 晴れ 槍ヶ岳肩～中岳～南岳～キレット～北穂高岳～涸沢幕営

28日 晴れ後曇り 潟沢～北穂高岳～涸沢岳～奥穂高岳～涸沢

29日 曇り 潟沢～奥穂高岳～前穂高岳～岳沢～上高地幕営

30日 晴れ 上高地にて解散

○個人山行

- ・大町～烏帽子岳～野口五郎岳～水晶岳～鷲羽岳～三俣蓮華岳～槍ヶ岳～上高地
小柳津次清 関義臣 他 2名
- ・南アルプス 戸台～北沢峠～千丈岳～駒ヶ岳～地蔵岳～早川峠
高柳照次 他
- ・四ッ谷～白馬岳往復 ポッカ（細野で幕営）
坂井靖 田島守 7月1日～15日
- ・その他



夏山合宿より 天井沢から北鎌尾根を望む

(田島 守 記)

1954年度（昭和29年度）

○新人歓迎山行

- ・妙高山登山
- ・ルート 田口駅～観光ホテル～源泉～頂上～源泉～田口駅
- ・5月29日、30日

- L百瀬斐敏 田島守 浅野井哲 吉澤健 久保田寛 渡辺糸枝
- 記録 長野駅集合14：30～列車発14：50～田口駅着15：30～出発16：00～観光ホテル下17：05～源泉下の沢18：25幕営 30日 起床5：00～朝食6：00～出発7：10～源泉8：10～天狗堂9：00～頂上11：20～昼食後下山12：00～雪上訓練～幕営地3：30～テント撤収、出発14：30～田口駅16：50～列車発17：05
- 感想 本年度最初の山行で、お互いの気持ちも打ち解け、山の気にも触れ楽しい山行となった。6人用テント一張に6人入ったので狭く大変だった。朝、ルートは草で覆われ、膝から下は朝露に濡れた。残雪多く、ピッケルワークの基礎訓練もでき良い山行となった。帰りの列車内で解散。

○戸隠山行

- 5月22日、23日
- 田島守 吉澤健 久保田寛
- 雨の中午後出発、中社でバスを降り、越清水原でキャンプ。23日は曇天、5：30起床～出発7：00～奥社を経て戸隠山八方睨10：00～一不動12：00～中社15：30～バスにて長野へ。

○美ヶ原山行

- 6月12日、13日
- 清水悟郎部長 L上島隆夫 高柳照次 田島守 中条嘉代子 若林徳子 大西久子他
- 長野13：30～列車松本15：30～バス大手橋16：00～三城牧場18：30～小広場17：30キャンプ。 13日 起床5：30～出発7：00～王ヶ頭9：30～大文字岩にてロッククライミングの練習の後10：30出発19～焼山11：30～武石峰12：30～武石峠13：30～鳥帽子岩14：30ここで浅間より登った百瀬、久保田等と合流し、鳥帽子岩登攀。出発15：30～松本にて解散。

○夏山合宿

- ルート 大町～葛温泉～鳥帽子岳～槍ヶ岳～北穂高岳～涸沢～上高地
- 7月10日～25日
- L百瀬斐敏 田島守 久保田寛 吉澤健 柳沢澄子
- 記録
- 10日 全員松本に集結（樋口宅泊）
- 11日 松本駅9：00～大町駅10：00～葛温泉12：45昼食・出発13：30～七倉14：10～山の神14：40～不動の滝16：15～濁小屋16：30～ブナ立尾根登り口17：15幕営。

- 12日 曇り時々雨 出発8:00～三角点11:35～鳥帽子小屋14:10～幕営準備後南よりの斜面で雪上訓練（グリセード他）
- 13日 快晴 出発7:30～三ツ岳9:00～野口五郎岳10:40～赤岳15:40幕営
- 14日 曇り後雨 出発7:50～ワリモ岳9:50～鷲羽岳9:35～三俣蓮華小屋10:35～双六岳乗越16:30～双六池17:00幕営
- 15日 雨 風雨強く停滯
- 16日 曇り 出発7:35～樅沢岳8:20～槍ヶ岳肩12:50昼食休憩後大槍～曾孫槍～孫槍～子槍登攀15:30～19:00幕営
- 17日 曙り後雨 出発8:30～中岳9:30～南岳11:00～切戸最低鞍部13:30～北穂高岳16:30北穂小屋泊
- 18日 小雨停滯 南稜を下り涸沢より小屋の荷物の荷揚げ
- 19日 曙り時々雨 出発10:30～涸沢12:00～横尾本谷13:00～横尾15:00～明神17:00～梨平18:20～信大サマーテント泊 柳沢は北穂小屋にて手伝い
- 20日 曙り 北穂小屋の荷物の荷揚げ田島、久保田上高地～涸沢往復
- 21日 晴れ時々曇り 小梨平にて休養 百瀬松本へ、吉沢足ひざの痛み強く診療所にて診察を受ける
- 22日 晴れ 田島、久保田北穂高へ荷揚げの手伝い 吉沢足の痛み引かず下山する
- 23日 晴れ ひとまず夏山合宿終了 久保田下山 百瀬、田島荷揚げ手伝い
- 24日 晴れ 百瀬、田島、柳沢北穂小屋の手伝い 午後滝谷第二尾根の東京都立人山岳部員遭難の救援の手伝い百瀬、田島
- 25日 晴れ 出発8:00～涸沢9:30～横尾11:00～明神12:30～上高地13:30～松本17:30解散
- ・感想 予定していた涸沢での定着合宿ができず縦走のみになってしまった。しかし、縦走中に時間の余裕をみて鳥帽子岳、東沢乗越付近、双六池付近等でピッケル技術を中心とした雪上訓練ができた。また、槍ヶ岳の岩場でも岩登り技術を身に付けることができた。装備が貧弱で疲労が強かった。食糧もカロリー計算にもとづいて献立をたて実施したが、質量ともに不十分であった。健康管理面では痛みにたいしてきちんと処理できず無理がかかったり予定を変えざるを得なかったことを反省すると共に残念に思う。全体として、現状の部の実力に合った夏山山行であった。

○燕岳～槍ヶ岳縦走 ファリア会山行

・8月17日～20日

- ・L田島守 久保田寛 中条嘉代子 若林徳子 大西久子他12名

- ・記録

8月17日 晴れ後曇り 松本9:25～中房10:50打ち合わせ・昼食出発13:30～合戦

小屋15:40～燕山荘17:00燕岳往復 ファリア会員は燕山荘泊 部員は幕営

8月18日 晴れ後雨 出発7:30～大天井9:25～赤岩岳10:45～西岳小屋12:40～槍ヶ岳肩の小屋16:40 ファリア会員は小屋泊 部員は殺生岩小屋付近で幕営

8月19日 雨後曇り 小屋～槍ヶ岳頂上往復9:30～10:45 出発11:20～槍沢13:00～一の俣14:00～横尾15:15～徳沢16:35～明神17:35～小梨平18:30 信大サマーテント泊

8月20日 曇り後晴れ 解散各自上高地散策の後バスで下山

- ・感想 希望者を募っての第1回ファリア会登山であった。雨にたたられた日もあったが、楽しい山行であった。夏休み中であり参加者の確認など大変だった。

○秋山山行兼ファリア会山行

- ・10月1日～7日

- ・清水悟郎部長 L百瀬斐敏 吉澤健 久保田寛他10数名

- ・記録

10月1日 松本～上高地～西穂高小屋～西穂高岳～西穂小屋泊

2日 西穂小屋～焼岳～中の湯泊

3日 ファリア会山行解散下山。百瀬 吉澤 久保田は冬山の偵察を兼ねた山行に出発し、上高地で諸準備。小梨平で幕営。

4日 上高地～下又白出合～下又白谷往復～奥又白出会幕営

5日 出会出発～奥又白池～A沢登攀～釣尾根～奥穂高岳～涸沢～奥又白出会幕営

6日 出会～横尾幕営

7日 横尾～蝶ヶ岳～常念岳～前常念～一の俣出会幕営

8日 出会～前常念へのルート偵察～烏川～柏矢町～松本解散

- ・感想 奥又では前穂北尾根の岩壁に胸躍る思いだった。冬山の偵察は順調に進み、赤布の標識を木につけルート開拓はほぼ完全にできた。食糧がきわめて悪かった。

(詳細記録不明)

○戸隠山行

- 11月14日、15日
- 清水悟郎部長 L田島守 百瀬斐敏 浅野井哲 久保田寛
- 14日 学校出発10:00～一の鳥居12:00～戸隠中社14:10～戸隠牧場15:00幕営
- 15日 出発9:30～奥社10:30～戸隠山八方睨11:50昼食新雪約10センチ～一不動
13:40～牧場14:20(ゆっくり休憩)～戸隠中社17:00のバスにて長野へ～解散

○冬山合宿

- 新ルート（厳冬期前常念より常念岳・信大ルートと呼ばれる）による常念岳登頂
- ルート 柏矢町～冷沢～前常念尾根P8～前常念～常念岳～前常念～P8～冷沢～柏矢町
- 1955年12月25日～27日、1955年1月1日～7日
- L百瀬斐敏 田島守 浅野井哲 久保田寛 柳沢澄子
- 記録

サポート隊 百瀬 田島 浅野井 柳沢

12月25日 曇り時々晴れ 長野6:15～松本8:07～柏矢町8:55～準備後出発9:20～烏川10:30～大助小屋12:25～冷沢14:40積雪20センチ～三菱小屋16:10積雪50センチ小屋の中に夏用天幕を張り泊、寒さ厳しい。

26日 晴れ後小雪 起床6:30～出発9:55～ベースキャンプ予定地11:45B・C設営（夏用テント）、昼食後出発14:15～A・C設営地へのルート作り、積雪70～100センチ、急な斜面を大木を避けて直登、森林帯で雪崩の危険はほとんど無し、P8（紅葉ピーク）が見える地点（S地点）16:00、積雪100センチ、目印の木の下に石油等をデボ、下りラッセルでルートを作りつつ下山開始16:40～B・C到着17:20B・C泊。

27日 小雪 B・C撤収下山

本隊 百瀬 田島 久保田

1月1日 曇り 全員松本に集結。富士山大遭難のため、多くの大学山岳部冬山山行を取りやめる。そんな中、予定通りの山行を実施することを確認する。また、慎重な行動を誓い合う。

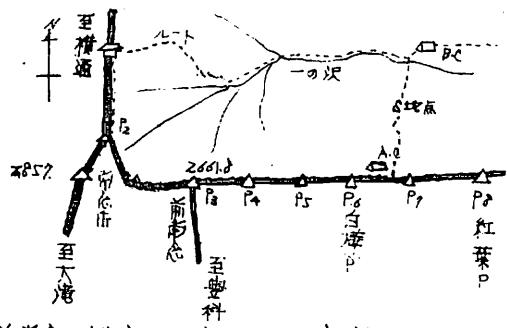
2日 小雪 柏矢町発7:55～大助小屋10:30～冷沢12:00～三菱小屋13:50積雪30センチ～B・C地点14:40幕営準備、ワインパー型テントを張る。積

雪40センチ、17:00の気温-10°C

- 3日 晴 A・C設営のためB・Cのワインパーテントを撤収し、夏山用テントにする。ワインパーテント、マット用のベニヤ板等の荷揚げ。出発10:05～S地点12:00～森林帯を抜けた地点14:30 積雪150センチ～ラッセル非常に厳しい。稜線15:30 雪はクラストしており歩きやすい。風強く寒さ厳しい。A・C地点16:30 直ちにA・C設営出発17:00～空身で駆け下りるB・C着17:50 夏山用テントのB・C泊。
- 4日 晴 A・C用の食糧等を持って出発 9:10～S地点でデポした石油等も持ちA・Cへ、到着11:25 テント付近の整備風強く寒さ厳しい。夕方から風強くなり雪舞う。
- 5日 夜半から吹雪、テント吹き飛はされるのではないかと思われるほど、シラフに入り寝ていて体が持ち上がる感じだ。停滞。
- 6日 小雪 吹雪はやんだが、視界は効かず雪が断続的に降り続く。出発準備、出発7:30～P6 8:15～P5 8:50～P3（前常念岳）9:50～常念岳10:20濃霧で視界は数メートル、ほとんど周囲は見えない。風強く雪は横なぐりに吹き付ける。写真を撮りすぐに下山10:35～P3 10:50～A・C着12:30休憩後A・C撤収、出発14:00～森林帯に入ると風は静かになるが、雪は降り続く。B・C着16:30泊。
- 7日 小雪 B・C撤収出発13:30～大助小屋16:30～柏矢町18:30～松本19:00解散。



常念岳頂上にて



前常念から常念へ (信太ルート) 初登頂

感想・反省 秋の偵察が十分になされていたので、ほぼ予定通り登頂でき、信大ルートが開拓された。しかし、装備の貧弱さは行動能力を著しく弱めた。ワインバー型冬山用テントが一張しか使用できず稜線上の行動等制約を受けた。オーバーシューズが用意できず、三人共凍傷寸前の状態であった。マットがなくベニヤ板を適当な大きさに切り使用したが、強い風の中の運搬は大変だった。風で煽られバランスを失い危険であった。この装備では、一週間程度の山行が限度であると痛感した。

食糧は質、量ともに良かった。食パンを乾燥させて作った非常用パンは、水分がないと食べにくく工夫が必要だ。

技術面ではアイゼンテクニックが不十分、特に35kg以上の荷物を背負って稜線を行動する際のバランスの取り方の訓練が求められる。

秋以来の綿密な計画、訓練、暮れの荷揚け等細心の注意を払ったため成功できたことは本当にうれしいが、本隊の参加者が3名だけになってしまったことは残念だ。

○スキー訓練

- ・1月21日、22日　・妙高高原池ノ平スキー場
- ・清水部長　L百瀬斐敏　坂井靖　田島守　吉澤健　水科信
ボーゲン中心に訓練、部長、百瀬、坂井の指導による。

○スキー訓練合宿

- ・2月5日～8日　　・志賀高原信大ヒュッテ
- ・清水部長　L百瀬斐敏　小柳津次清　上島隆夫　三浦文子　坂井靖　浅ノ井哲
田島守　柳沢澄子　吉澤健　久保田寛　水科信
山岳スキー技術の習得を中心に訓練する。

○送別スキー合宿

- ・3月9日～11日　・志賀高原信大ヒュッテ
- ・L百瀬斐敏　小柳津次清　関義臣　上島隆夫　高柳照次　田島守　柳沢澄子
若林徳子　中条嘉代子　吉澤健　久保田寛　水科信　長門経子
9、11日は山岳スキー技術訓練。10日は熊の湯を経て横手山ヘツラー。

○春山山行

- ・春山合宿
- ・ルート　猿倉～杓子尾根～杓子岳、白馬岳

・3月28日～4月4日

・L百瀬斐敏 田島守 坂井靖 吉澤健 久保田寛 水科信

・記録

3月28日 曇り 松本9:00～四ツ谷11:50～細野12:20～沼池尻15:15～中山沢
16:15～猿倉小屋17:00猿倉小屋をB・Hにする。積雪約100センチ。

29日 晴 百瀬 坂井 久保田は杓子尾根のルート偵察、田島 吉沢 水科は双
子尾根の偵察をする。6:00出発～14:00B・H着。偵察の状況を話し合っ
た結果杓子尾根より登り双子尾根を下山することに決める。

30日 晴 B・H出発5:45～杓子尾根取り付き点6:40～双子尾根・杓子尾根
合流点9:55～杓子岳頂上10:30～合流点11:30～奥双子12:30～B・H
着14:50。好天に恵まれ快適な山行となる。全員杓子岳登頂に気を良くす
る。

31日 曇り 杓子尾根末端に前進キャンプを設営し、白馬岳登頂の準備をする。
B・H出発9:45～A・C予定地14:25。A・C設営後B・Hへ往復荷揚げを
する。また、雪洞を掘る。積雪2メートル以上、立派な雪洞ができる。

4月1日 雨後曇り 視界全くきかないため停滞。晴間を見て白馬主稜偵察、スキー
訓練。

2日 曇り 気温高く雪崩の危険度高い。行動中止停滞。スキー訓練。白馬岳方
面より雪崩の音しきりに轟く。

3日 曇り 依然視界効かない。坂井 吉沢 久保田 水科は大雪渓より白馬岳
登頂に出発6:00～頂上9:30～A・C着11:30。百瀬 田島白馬主稜よ
り白馬岳登頂に出発6:10～主稜に取り付き登攀を続けるが、雪崩が頻發
し危険なため引き返すことにする8:30～A・C着10:00。

食糧不足によりA・C撤収下山出発13:00～猿倉小屋15:08～二股18:10
～細野19:10。

4日 雪 細野～四ツ谷～松本解散。

感想・反省 本年度最後の山行であった。充実した山行であり成果も多かった。夏以来
のトレーニングの賜物で、全員の基礎体力がそろい、各人の動きもよく1年部
員の吉澤、久保田、水科の成長は目を見張らせた。輪かんじき、アイゼンテ
クニックも著しく向上し、雪洞研究も十分できた。また表層雪崩の研究も十
分できたと言えよう。冬山用テントは1張しか準備できなかったが、雪洞の

使用で補えた。しかし、雪洞については場所、深さ等十分検討する必要がある。また、湿気が多く衣類は湿りがちであった。換気の必要を感じた。入り口にスキーを立て掛けシートを垂らした。スコップは当然ながら常に準備しておいた。日が経つにつれ天井から水滴が垂れ、長期には荷物置き場として使用すべきである。行動については稜線上での動きが少なく、今後稜線での行動を中心におく山行が望まれる。食糧面はまずまずだったが、塩分が不足しこたえた。なお、全員がひどい日焼けになった。クリーム等を用意すべきだと反省する。装備ではザイルが不足した。白馬主稜登攀が不成功に終わったのは心残りである。表層雪崩には神経質になるほど注意し気を配ったが、いくら注意してもし過ぎることはない。30日杓子尾根上部を登行中トップ田島が稜線を2メートルほどまいた時、あっと言う間に足元の新雪が雪崩落ちた。勿論、部員は一瞬緊張しただけで済んだが、もう2メートルぐらい下をまいたら完全に足をすくわれたのではないかと思う。収穫の多い山行で全員満ち足りた気持ちで四ツ谷の土の感触を味わった。

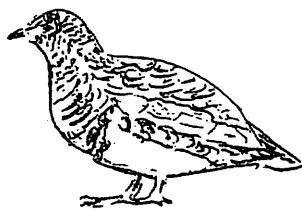
○個人山行

- ・徳本峠から焼岳～西穂高岳 6月25日～28日 百瀬 田島
- ・槍ヶ岳と槍ヶ岳周辺の岩場登攀 8月4日～9日 百瀬 田島他

(坂井 靖記)



シロウマウスユキソウ



ライチョウ

長野山岳部初期の山行

昭和29年、百瀬斐敏が3年に編入し、部員の強い要請を受けて、リーダーを引き受けることにより、山岳部の基礎はほぼ固まった。自然に親しむことや、wanderungを望んで入部した部員もかなりおり、そういう希望に沿った山行も行われたが、やはり中心はアルピニズムの追究であった。この年は、5月の新入部員歓迎登山に始まり、夏、秋、厳冬、春とオールシーズンの山行が実施されて、その後の部活動の原型がつくられていった。しかし、部員個々の経験は当然のことながら浅く、力量も低く、部費も乏しい中で、個人装備と団体装備を整える努力がなされた。登山靴、ピッケル、ザックは結構高価で、購入するのは容易ではなかったから、部費で手に入れたザイル、テントなどは、まさに部の宝物であった。装備を先輩や友人から借用して数を合わせる苦労もあった。天幕は学部の学生課などのものが貸し出されていたが、他のクラブの利用者などとの日程調整が大変であった。無積雪期の山行には、終戦前から利用されていた履物である地下足袋が、軽くまた岩場などを歩くのにフリクションがきいて快適であることから多用された。

そんな中、山行費用や装備を整える費用を得るために山小屋の荷上げのアルバイトいわゆる歩荷をするのが、部員の夏休み前半の生活となっていた。白馬山荘、北穂小屋、針ノ木峠小屋などがおもな活動場所であった。柱などの角材を背負子に付けての登りはバランスをとるのが大変であった。

部としての活動以外に個人山行も行われた。部員外の仲間や研究室の仲間とのそれぞれの力量に応じた山行であった。

清水部長の提唱で、より多くの学生に山を親しんでもらうための山行も山岳部としての活動として位置づけられた。「ファーリア登山」と名づけられ29年は燕岳～槍ヶ岳の縦走を、30年は西穂高岳～焼岳山行を行った。10数名の参加者がありそれなりの成果はあったが、部員にとっては負担でもあった。

積雪期は天幕の絶対数が不足していたため、厳冬期でも風の弱いBCは夏山用天幕に炭俵のマットで寒さを凌いだ。春山は専ら雪同を作つて利用した。シュラフザックは、朝鮮戦争のアメリカ軍の使用済みのものが払下げられており比較的安く手に入った。また、マットの代用品としてベニヤ板を使った。大きい板を適當な大きさに切つて、四隅に穴を開けて紐でつないだ。運ぶときは折りたたんでザックに付けた。石油コンロも性能の良いものは少なく、手や顔をすすぐだけにして食事の準備をした。無雪期はほとんど枯れ木などで

火を焚いた。多少の雨のなかでも火を燃やすことができるのも大事な登山技術の一つであった。枯木はかなり豊富にあり薪に不自由はしなかったが、稜線では枯れた這松は少なかった。キャンプサイトも決められておらず、水場、地形、風などを考えて場所を決めた。

食料は一応カロリー計算をした献立によったが、総じて貧しいものであった。冬山用として固くならない餅を特別注文してつくったり、特製パンを注文したりした。また、野菜を乾燥させ重さを減らしたものなどそれぞれ工夫した。

山行は希望者によったので、女子部員も一緒に行動したが、積雪期は男子だけの山行が主になった。夏山も途中から別行動をとったりして、体力や技術面での配慮をした。しかし、こういう配慮は必ずしも女子部員の納得するものではなく、後に、女子部として独自の計画による山行をもつようになった。学部の「志賀山荘」を拠点としたスキー練習や送別会などは楽しい集いで参加者は多かった。

部員も年々増え活動も広く深くなって行った。

(百瀬 斐敏)

1955年度（昭和30年度）

○新人歓迎山行

・穂高横尾谷合宿

- ルート 松本～島々～沢渡～中の湯～上高地～横尾谷～槍ヶ岳～同コース下山
- 人 島守 坂井靖 吉沢健 浅野井哲 水科信 清水忠治 宮坂昭吉 小林盛男
- 日 4月29日～5月5日

・記録

4月29日 曇り 長野 6:15～島々 10:00～沢渡 12:05 徒歩～坂巻温泉 14:30～中の湯 15:15 幕営

30日 晴れ後雨 中の湯発 6:30～河童橋 8:30～横尾谷 12:00 BC設営

5月1日 沈殿 夕方雨は止む。

2日 BC～槍ヶ岳往復 計画では小槍の登攀を予定していたが、予想外の積雪に槍沢ではラッセルにアルバイトを極め、軍靴の貧弱な装備で大槍を登るのさえ、アンザイレンで3時間を要し、計画は変更せざるを得なかった。実働時間は13時間を越えた。

3日 曇り時々雨 BC～涸沢往復 計画では北穂高岳、奥穂高岳を登頂することになっていたが、濃いガスに小雨さえ降り始め、雪崩の危険も出て来た

ので涸沢小屋上部から引き返した。

4日 曇り B C撤収～上高地～中の湯幕営

5日 曇り 中の湯～沢渡～島々～松本～長野 予定では両日、一の俣小屋から常念岳を経て鳥川に下る予定だったが、天候悪く中止した。



槍沢を登る

○女子新人部員歓迎登山

・妙高山行

・5月28日～29日

・参加者 L田島守 坂井靖 水科信 小林盛男 宮坂昭吉 折井通夫 河瀬
高山澄子 宮本幸子 平林俊子

・記録

5月28日 長野駅～田口駅～赤倉～源泉幕営

29日 源泉～天狗堂～頂上～グリセード練習～源泉～赤倉～田口駅

○夏山合宿

・夏山合宿(ボッカ、ファリア会を含む)

・ルート 後立山北部縦走

・7月1日～8月2日

・L田島守 坂井靖 浅野井哲 吉澤健 久保田寛 水科信 田中哲夫 小林盛男
河口歌子 高山澄子 平林俊子 松本きく子

☆合宿に先立って、7月1日～10日まで、次のようにトレーニングを兼ねてボッカを

した。針の木小屋・大沢小屋 田島守 久保田寛 水科信、北穂小屋 坂井靖 吉澤健

☆ファーリア会白馬岳山行

7月22日～23日 L坂井靖 浅野井哲 小林盛男 一般学生十数名

7月22日 長野駅～信濃四ッ谷駅～細野～二股～猿倉～白馬尻～大雪渓～白馬山頂～キャンプサイト～幕営（一般学生は頂上小屋泊）

23日 キャンプサイト～大雪渓～白馬尻～猿倉～信濃四ッ谷解散

・合宿記録

7月25日 晴れ 細野～二股～関滝～不帰沢・唐松沢出合B C設営

26日 晴れ B C～不帰沢・唐松沢偵察～B C 不帰沢の北・南壁でロッククライミングの計画であった。その偵察の結果、壁に至るまでのアプローチは水量多く、両側は厳しい廊下で、水に磨かれたスラブの岸壁が直立しており、このスラブを通過するのさえ不可能であることがわかった。（不帰岳一峰東壁の初登攀は1941年甲南大的小川氏によるが、時期が4月で、廊下には雪があり通過が比較的容易であったことが後になって分かった。）本格的な登攀用具、あぶみもなく、ハーケン、カラビナも僅かしか持参していなかったので、クライミングは不可能と判断し、縦走に移ることにした。

27日 晴れ B C～鎧温泉～大出原幕営

28日 晴れ 大出原～稜線～唐松岳 ここで女子4名は坂井リーダーのもと下山～八方池～細野～四ッ谷～松本解散

本隊 唐松岳～白岳幕営

29日 晴れ 白岳～五竜岳～八峰キレット幕営 水なくかなり下の沢へ残雪取りに下る。

30日 晴れ 八峰キレット～鹿島槍ヶ岳～冷池幕営

31日 晴れ 冷池～爺ヶ岳～種池幕営

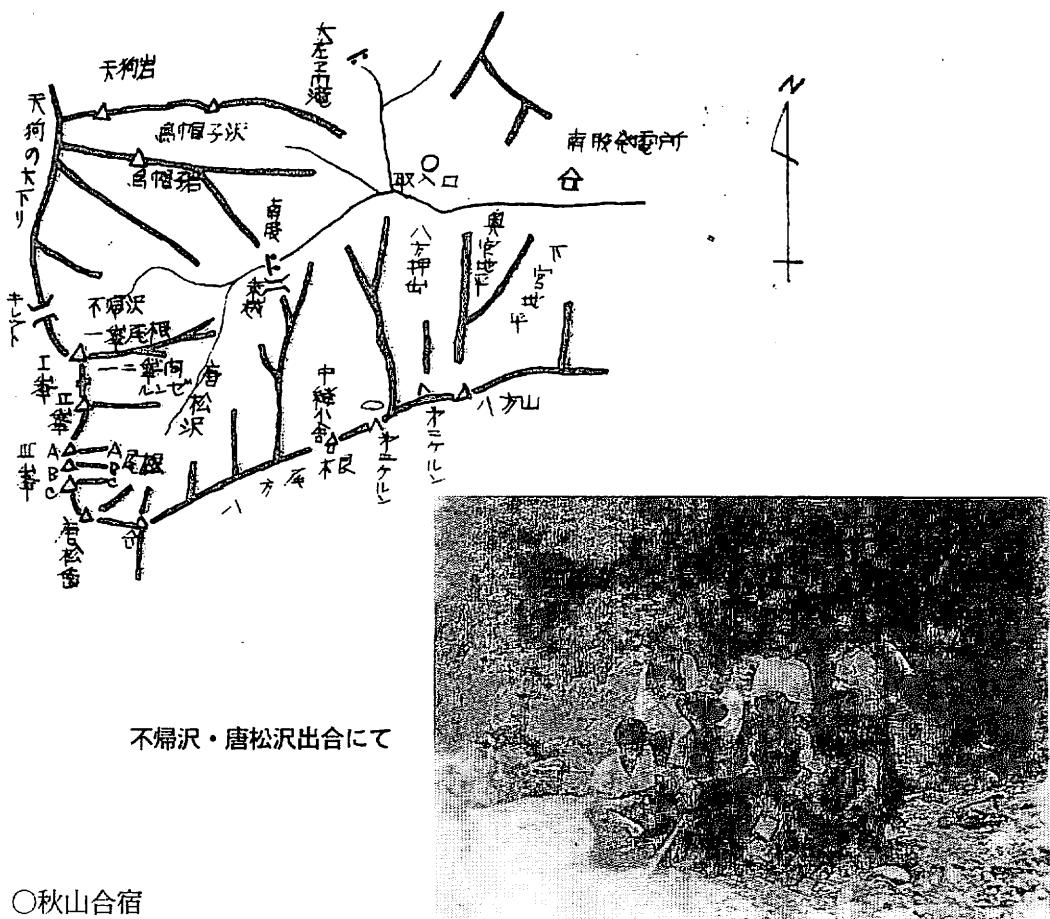
8月1日 晴れ 種池～鳴沢岳～鉢ノ木岳～峠幕営～蓮華岳往復

2日 晴れ 鉢ノ木岳～大沢小屋～大出～大町～松本解散

・感想 縦走合宿中ずっと好天続きで雨が降らなかった。種池の水もほとんどなく、暗くなつて幕営し、エッセンにしたが炊きあがった飯盒の飯はボウフラ入りであった。この合宿は、前半ボッカを兼ねたトレーニングの期間が長く、疲労が蓄積してきていた。帰途、大沢を過ぎた途中から森林組合の材木を出すトラックに便乗

させて貰い、退屈な里山の道を一気に下ったことが記憶されている。

唐松沢附近概念図



○秋山合宿

- 9月27日～10月8日
- L田島守 上嶋隆夫 久保田寛 小林盛男 宮坂昭吉 河口歌子 高山澄子
松本きく子 宮本幸子 他
- 記録

9月27日 雨 長野～松本～島々～上高地～明神池養魚場～大雨のため養魚場の小屋泊

28日 雨 停滞 台風接近

29日 曇り 明神～横尾～涸沢 幕営

30日 曇り風強し テント7：10～北穂高岳東稜より北穂高岳9：30～奥穂高小屋11：40ザインテンを下り～涸沢14：00 テント風雨で潰れている。張り直し支柱を手で支える。夜半台風通過の模様。眠れず。

- 10月 1日 曇り後晴れ 午前中濡れた衣類を乾かす。午後 1：15前穂北尾根へ。5、6のコルへ田島、宮坂、河口、高山、松本、宮本 6、7のコルへ久保田、上嶋、小林 6峰で合流 5：00 B Cへ。信大文理学部山岳部リーダー平沢氏の遭難事故を知る。
- 2日 曇り 久保田、上嶋、小林、宮坂、前穂3峰フェイス登攀。他は奥穂～前穂を往復する。
- 3日 曇り後雨 滝谷第4尾根登攀 田島、小林 第2尾根P2フェイス登攀
久保田 宮坂。 上嶋、河口、高山、宮本はB C～横尾～一の俣～槍沢～槍ヶ岳を往復する。7：20出発し、雨の中22：00帰着。
- 4日 曇り後晴れ 女子4名と特別参加の高校生清水（2日入山）下山、田島上高地まで送る。
滝谷クラック尾根登攀 上嶋、久保田、宮坂、小林
- 5日 晴れ後雪 滝谷飛驒尾根登攀 田島、久保田、宮坂。上嶋下山
- 6日 曇り 新雪数センチ積もる。テントを撤収し横尾谷へ移動。
- 7日 曇り 屏風岩1ルンゼ登攀上部より引き返す 田島、久保田、宮坂
- 8日 晴れ テント撤収下山。横尾～上高地～松本解散。田島、久保田文理学部山岳部により香典をさし上げ平沢氏への弔意を表す。

○冬山合宿

- ・北アルプス八方尾根（唐松岳）合宿
- ・12月25日～1月3日
- ・L田島守 吉澤健 久保田寛 水科信 田中哲夫 小林盛男 宮坂昭吉 宮本幸子
松本きく子 清水悟郎部長（部分参加）松本工業高校生1名
- ・記録

- 12月25日 松本駅集合～信濃四ッ谷～細野～丸山宅～細野部落はずれ幕営
長野から来るメンバーが列車に乗り遅れたこと、信大本部から借用することになっていたワインパーテントが、厚生補導の手違いで整えてくれてなく時間がかったことなどで、全員が細野に集結し、出発の体勢が整ったのが午後5：00近く。やむなく細野部落はずれの雑木林で幕営した。
- 26日 細野～馬留め小屋～北尾根～黒菱B C設営 スキー基礎訓練
- 27日 スキー基礎訓練 この合宿に特別参加の予定であった松本工業高校青柳君の所在が本日になってもわからず、慎重を期してキャンプ地から細野部落

まで北尾根コース（久保田、宮坂）リーゼンスラロームコース（吉沢、小林）に分かれて探す。結果的には先に下山して探していた丸山君と四ッ谷駅にいて所在確認は終了した。初日定刻に打ち合せ通り全員が集合できなかったことが原因であることが判明した。 清水部長下山。

28日 BC～第一ケルン往復 雪上歩行とスキー基礎訓練 終日激しい降雪。風強くラッセルに苦しむ。全員シール無し。帰りはボーゲンにてお互いを確認しつつ慎重に下る。激しい降雪でテントが埋まるのを交替で雪掻き。

29日 激しい降雪が終日続き、テントが埋まるのを防ぐ雪掻きに明け暮れる。
宮坂、宮本、松本下山

30日 降雪終日続く。スキー基礎訓練と雪掻き。雪の壁2メートル以上。田中、小林下山、テント一幕下ろす。

31日 BC～黒菱の頭往復 終日降雪続く。降雪の中登り2時間、下り15分、山スキーの気分で一気に下る。高校生丸山君下山。

1月1日 雪 BC～第1ケルン～第2ケルン～第3ケルン～下のかんば（スキーデボ）～上のかんば下～下山 風、雪共に強く引き返す。登り、深い新雪のラッセルにはまられる。スキーシールが必需品であることを痛感する。下りは広い尾根をスキーで一気に飛ばした。腰までもくる新雪ながら、粉雪で抵抗少なく豪快だ。

2日 雪 BC～第1ケルン往復 再度唐松岳を試みるも風雪激しく引き返す。地吹雪強く吹き荒れ第1ケルンでは歩行すらままならぬ状態。午後スキー基礎訓練。

3日 晴れ BC撤収～北尾根～細野丸山宅～四ッ谷～松本解散 昨日までとは打って変わって快晴。しかし、気温は-14°Cとなる。下山を一日延ばし唐松岳をめざそうかとも協議したが、雪の状態は変わっておらず、ラッセルの時間等を考え下山とした。松本で借用したアイゼンその他を返却し帰途に就く。この合宿の経費合計7,200円（装備費3,700円—ガソリンコンロ、ガソリン、ベニヤ板、ローソクなどが主。食料費3,500円であった。）

○春山合宿

- ルート 北アルプス猿倉～小日向尾根～杓子岳～白馬鑓ヶ岳～不帰岳
- 3月17日～4月4日
- L田島守 吉澤健 久保田寛 水科信 小林盛男 宮坂昭吉 清水悟郎部長（部分参加）

• 記録

- 3月17日 長野～松本（百瀬宅に泊めていただく）物資購入、装備借用など準備。
- 18日 松本～信濃四ツ谷～細野丸山宅（荷物多く一部を残す）～沼池尻～猿倉小屋泊昨年の春山合宿の時とは雪の状況など大分変わっており、加えて荷物多く、長靴に輪かんじきの歩行ははからず猿倉小屋に到着したのは19時近い時刻であった。
- 19日 曇り 猿倉小屋～丸山宅 荷上げ往復 夜半から雨となる。久保田を小屋に残し荷上げに下りる。アプローチ長く、小屋に到着したのは21時近い時刻であった。
- 20日 曇り 猿倉小屋～小日向尾根、鎧温泉への乗越（B C予定地）荷上げ往復
- 21日 晴れ強風 猿倉小屋～B C荷上げ往復～C 1予定地偵察（吉澤、久保田）午前中、風強く吹き荷上げはからず。輪かんじきの爪、雪面に立たず歩行に困難する。爪を上にして使用する。
- 22日 猿倉小屋～B C荷上げ往復（荷上げ終了）テント1張りを設営し、さらに斜面を利用して雪洞を掘り始める。およそ7時間かけて完成する。雪の壁はローソクの光、乱反射して大理石の御殿のように美しい。夕食は全員ここでとる。
- 23日 晴れ C 1設営と荷上げ偵察隊（水科、久保田）先発し、C 1予定地を探す。他は荷上げ。尾根筋は雪がしまっていてアイゼンが快適にきく。ザイル固定、C 1（ジャンクション）設営を順調に行う。
- 24日 B C～C 1荷上げと主稜稜線偵察 気温上がり白馬方面に雪崩の音しきりにする。ザイルフィックス時も雪が緩みクレバス大きくあき始めたので、その前方に荷物デポして引き返す。小雨時々降る。午後スキー練習。
- 25日 雨 停滞 気温7度まで上がり、雨降る。雪洞の天井から雨垂れ落ちる。4人テントに移る。
- 26日 雨 停滞 雪洞の天井から雨の滴盛んに落ち、天井の雪はげしく落下し始める。
- 27日 晴れ B C～C 1荷上げとC 2予定地偵察 快晴となり-10°C。偵察隊は早く出発。荷上げ2隊C 1へ向かい、更にデポの荷物をC 1に上げる。新雪20cmほど積もりラッセルに苦労する。荷上げ2隊もC 1を経て主稜稜線に出る。偵察隊C 1に泊まる。

28日 BC～C1荷上げとパーティー再編成 田島、小林、宮坂C1へ。久保田BCへ。アタック隊吉澤、久保田サポート隊①田島、小林②水科、宮坂。BC泊吉澤、久保田。C1泊田島、水科、小林、宮坂。

29日 雨 停滞 5時頃より雨となり、終日降り止まず。

30日 晴れ アタック隊BC～C1～AC

サポート隊C1～AC～C1 気温やや高く晴れ。サポート隊C1から主稜線天狗の池東側にACの雪洞を掘り、必要物資を入れ、C1に引き返す。

31日 曇り アタック隊：AC～不帰岳往復

サポート隊（水科、宮坂）C1～A1往復

3:00起床し朝食。登頂の用意をして外に出るも、風強く歩行できず、引き返して雪洞入口の岩陰で待機する。5:00出発。途中ルート探索と懸垂下降を繰り返し、さらに登攀を続け8:25不帰岳頂上に立つ。テルモスのお茶と乾パンで一服し、8:45帰途につく。帰りはピッチを上げる。11:45AC着。白馬鑓ヶ岳の頂上近いところを水科、宮坂らしい二人の姿が見える。大声で合図するも風にかき消されて届かず、残念。雪洞に入り、食事をし、早々にシュラフにもぐりこむ(17:00)。サポート隊から次のメッセージが書きおかれていた。

「御苦労さん、サポート隊水科、宮坂は9:50AC着。小憩後天狗の大下り上に10:00着、10分程見守ったが残念なことに貴兄らの姿を認め得ず。しかし、十分なる成果をえたことを確信して帰る。11:50AC着。コップエールに水を作つておく。一つは湯にしておきます。ラジュウスにガソリンを入れておきます。なお、撤収は8:00にはACを出発される様リーダーよりの伝言。食糧の運搬に適さないものは食べて来て下さい。ベニヤは燃して可。風は強いが成功を信じます。」

4月1日 曇り アタック隊AC～C1 AC用の寒暖計が風に吹き飛ばされて折れてしまい気温不明なるも-15°C以下に下がったと考えられる。寒さ厳しく烈風吹き募り行動条件は全く良くないがAC撤収とした。帰途ゴーグルは曇り、一休もできないので、ゆっくりながら無休で行動する。8:30ACを後にし、9:20杓子岳頂上通過、10:30C1着。全員狭いテントに泊まり成功を喜び合う。

2日 晴れ C1撤収～BC

パーティーを元に戻して行動する。先発隊（水科、久保田）先行しザイルフィックスなどルート整備を行う。クラストした雪の上に新雪20cmほどあり、しかも朝からの快晴で雪は湿る。アイゼンに団子状に着き、その都度ピッケルで叩きおとさねばならず苦労する。途中、表層雪崩に巻き込まれたが、幸いにも全員無事にBC着。12:35。好天を利用して濡れたシュラフを干す。夜は登頂の成功を祝してウイスキー開栓。

3日 晴れ 午前中春スキーを楽しみ、BC撤収～猿倉小屋 13:00出発。荷物多く重いが足取りは軽い。輪かんじきで下る。小屋に残しておいたカンパのウイスキーで乾杯。小屋には他のパーティーもおらず、のんびりと。

4日 雪 猿倉小屋～細野丸山宅～四ツ谷～松本解散 小雪がちらつく中下山。松のばんばを過ぎて、長靴にはき代える。足が軽くて不思議な感じである。細野ではしばらく吸えなかったタバコをそれぞれ吸う。丸山さんに礼をし、松本で借用したテント、アイゼンなどを返却し、田島、吉澤は留守部隊の百瀬前リーダーの下宿へ報告に伺う。

・感想 痛感したことの一つに装備の貧弱さがある。冬期用ワインパートントはともかくとして、アイゼンは4個を松本工業高校から百瀬さんのつてで借用、輪かんじきも清水部長と細野の丸山さんからそれぞれ一つずつ借用したありさまである。ラジウスも全て借用品であった。今合宿で全員が揃えたのはオーバーシューズのみで、記録中ベニヤ板とあるのは、エアーマット代わりにシートの下に敷いて、下からの湿気、寒気を防ぐためのもので、どうにかザックに収まるように小さく切り、ペンキを塗ったお手製のものである。なお、個人装備のウインドヤッケも貧弱で主稜線の烈風にはいやというほど痛め付けられた。それでも凍傷にかかる者のなかったのは、幸運と言う外はない。装備の充実が急がれる。

○卒業送別スキー行

・志賀高原信大ヒュッテ

・3月6日～8日

・卒・修業生 百瀬斐敏 大西久子、長門絢子

清水悟郎部長 浅ノ井哲 坂井靖 田島守 久保田寛 水科信 吉澤健 田中哲夫

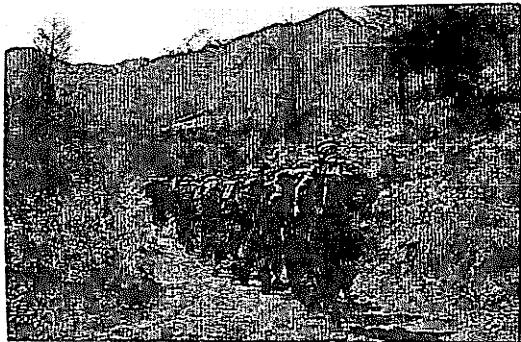
宮坂昭吉 小林盛男 平林俊子 高山澄子 松本きく子 宮本幸子 河口歌子

特別参加 鈴木先生 荒井先生 柴田先生 両角 小林 小林 坂口氏

中の日の3月7日にはヒュッテを出発し、延々と歩いて横手山頂上まで登った。帰りは山スキーの醍醐味を十分味わった。熊の湯にも横手山にもスキーリフトは一基もなぐスキーをかつついでの登りは大変であった。(部分的にはスキーを使ったが。)

(吉澤 健記)

1956年度（昭和31年度）



新人合宿より

○新人歓迎合宿

【コース】北アルプス常念岳

【参加者】J.吉澤健、久保田寛、小林盛男、田中賢一

（新人部員）宮尾裕、越田寛、遠藤英男、大森晋、饗場邦光

【期日】昭和31年5月2日～5月5日

【記録】

★5月2日 長野駅集合～松本駅～柏矢町駅～（これより歩き）～鳥川～前常念沢出会（幕営）

5月3日 BC～前常念岳～常念岳～常念沢（ここで雪上ザイル操作、雪上歩行、グリセード訓練を実施）～BC帰着。

5月4日 BC～前常念岳～東天井岳～大天井岳～常念沢～BC帰着。

5月5日 午前中常念沢で雪上諸訓練。午後BC撤収～鳥川～柏矢町～長野駅（解散）

【所感】 春の日の穏やかさと、身体の「なまり」でだるく、加えて新人部員歓迎の和気から、のんびりした山行だった。冬から春先にかけて起こった雪崩の押し出しが、処所に見られ、登山道も荒れていた。

○夏山合宿

【コース】剣岳～薬師岳～双六池～槍ヶ岳～北穂高岳～涸沢～上高地（剣にて定着合宿）



物見岩にて

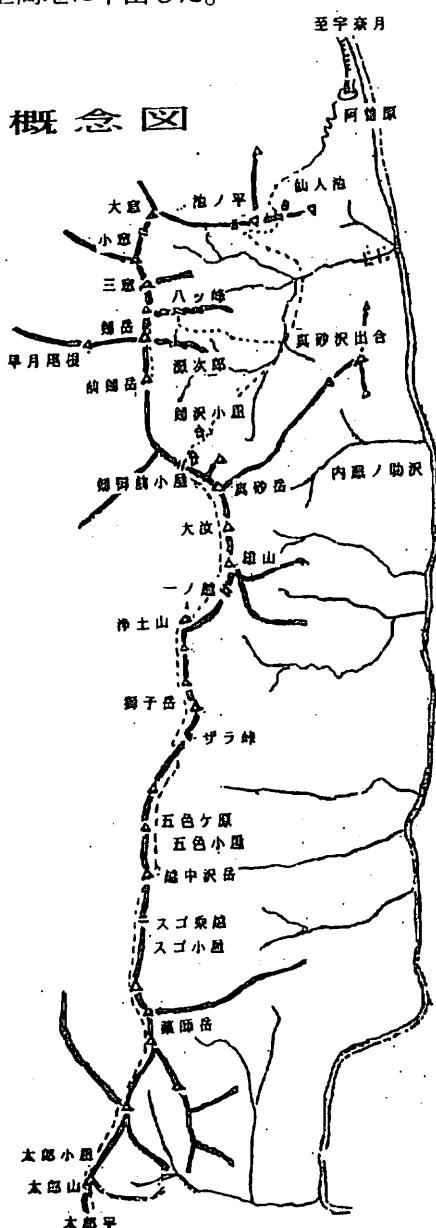
【参加者】 L田島守、S L吉沢健、久保田寛、水科信、小林盛男、河口歌子、宮尾裕、越田寛、宮下常子、

【期日】 昭和31年7月13日～7月31日

【概況】 この合宿は、S N A C としては初めての「北アルプス縦走」だった。入山後、連日の雨で停滞が多く、日程が大巾に伸び、真砂沢出合の定着合宿は「八ヶ岳～チンネ」登攀の1日のみで、縦走に入った。縦走も、前半は雨が多かった。最終、北穂で、百瀬さん合流し、滝谷の岩登りが出来た。全体としては充実した合宿で、満足して上高地に下山した。

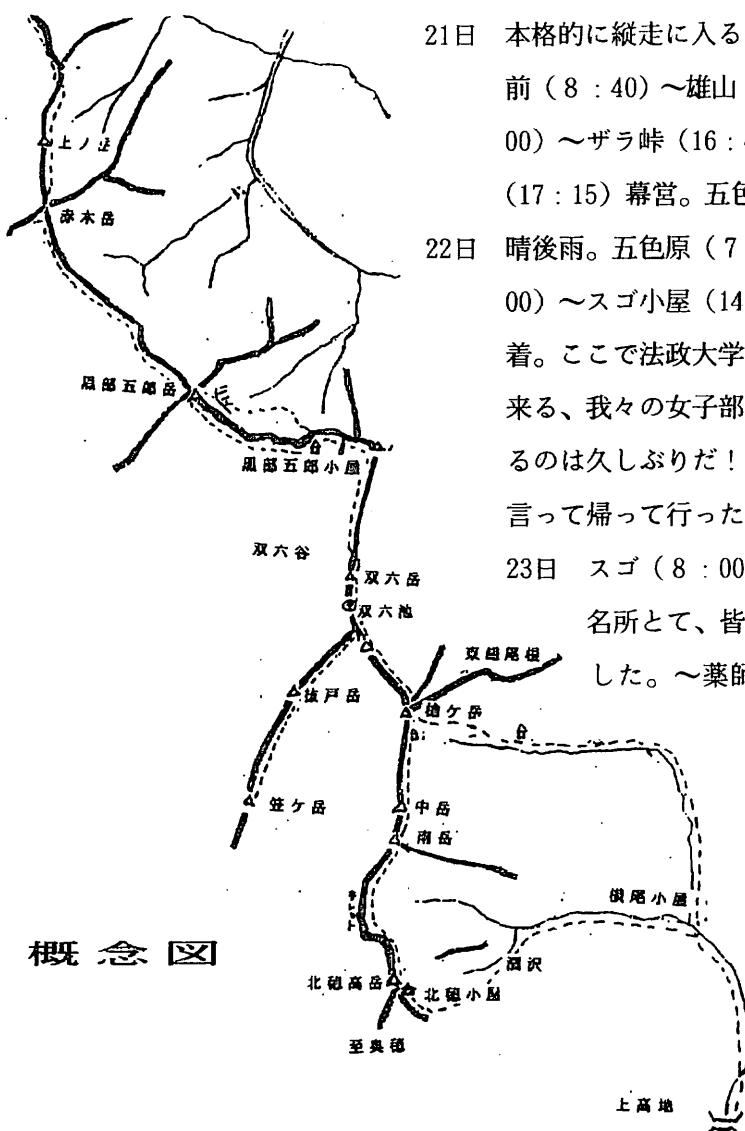
【記録】

概念図



- 18日 ようやく晴れた。池の平（7：40）～三ノ窓合宿（9：50）～真砂沢合宿（12：00）幕営。ここで剣の定着合宿に入る。ここには、各大学山岳部が集中している。目前に聳るハッ峰が迫力ある。
- 19日 晴、ハッ峰尾根の登攀、BC発（6：20）～5.6コル（7：50）～P6（8：50）～P7（10：00）～P8（10：30）～チンネ（11：00）～エッセン（11：45～12：10）剣岳（13：13）～長次郎谷グリセード～BC着（14：40）この日は天気も良く、快適な登攀が出来た。女子部員はテントキーパーとして残る。
- 20日 又雨となる。真砂沢合宿あきらめ、縦走に入る。少しでも前進すべく、真砂沢（8：00）～剣沢小屋（11：30）幕営。結局「剣」合宿は1日のみ。

風雨強し、源次郎尾根に未練を残す。



- 21日 本格的に縦走に入る。剣沢（7：30）～剣御前（8：40）～雄山（11：15）～一ノ越（13：00）～ザラ峠（16：40）雨となる～五色ヶ原（17：15）幕営。五色ヶ原は美しい。
- 22日 晴後雨。五色原（7：15）～越中沢岳（10：00）～スゴ小屋（14：15）～幕営地（15：30）着。ここで法政大学山岳部のリーダー挨拶に来る、我々の女子部員を見て「メッチンを見るのは久しぶりだ！信大には美人が多い」と言って帰って行った。
- 23日 スゴ（8：00）発～途中から雨、雷の名所とて、皆ピッケルをザックから外した。～薬師岳（12：20）～太郎平（15：15）幕営。薬師岳の登りは、きつく長かった。
- 24日 朝の大雨で、9時頃晴れたが、半日トカゲ。太郎平（12：20）～上ノ岳（14：

- 30) ~黒部五郎 (15:40) 幕営。濡れものの乾燥や、久しぶりのトカゲが出来た。
この辺は黒部源流で、高山植物も多く、この世の天国の感じがする。
- 25日 晴。出発 (6:00) ~黒部五郎小屋 (8:30) ~三ツ又蓮華 (10:30) ここで
グリセード訓練する。双六池着 (14:40) 幕営。
- 26日 晴。今日は皆で笠ヶ岳まで、サブザックでハイキング。出発 (6:10) ~抜戸
(7:50) ~笠ヶ岳 (10:20) ~双六着 (15:10) 快適な一日。
- 27日 晴。出発 (6:00) ~槍肩 (10:00) ~小槍登攀 (10:50~13:10) これより
女子部員等4名上高地へ下山、~中岳 (15:00) 幕営。拾ったニギリメシをオ
ジヤにしたら梅の種が出た。
- 28日 出発 (6:20) ~南岳 (6:50) ~キレット (9:30) ~北穂小屋 (11:30)
百瀬さんとおち合う。
- 29日 北穂小屋のボッカ、北穂~涸沢、1組 (9:30~14:10) 2組 (15:10~19:
30)
- 30日 滝谷岩登り、田島、小林、中央稜。水科、久保田、宮尾、第二尾根。(9:00
~14:00)
- 31日 滝谷、吉沢、久保田、クラツク尾根 (10:20~18:30) 百瀬、水科、宮尾、北
穂高北壁 (10:20~18:30) 田島、小林、ファリア会準備で上高地へ下山。
- 【装備】** • 主な団体装備、テント2シート8 コンロ1ナベ大小1 ザイル、三ツ道具2、
他。
• 主な個人装備、ザック、シラフ、ヤッケ、ピッケル、着替え1式 その他。
(所感) 雨に弱かった。テントの中の床はシートで、雨具はビニール1枚で防いだ。
- 【食料】** • 朝~飯、味噌汁、佃煮、・昼~飯、佃煮、・夜~飯、味噌汁、油炒め、
(所感) このメニューが標準的で、スタミナ不足だった。合宿が終わると体重が減った。
- 【部としての記録なく、河口さん、宮下さんの個人日誌参照。所感は全て現時点の記述】**

○秋山山行

- 【コース】** (前半) 八方尾根~五龍岳~遠見尾根 (冬山および春山の偵察山行)
(後半) 槍ヶ岳、北鎌尾根の登攀。
- 【参加者】** (偵察山行) L吉沢健、久保田寛、水科信、小林盛男、宮尾裕、越田寛
遠藤英男、宮本幸子、宮下常子
(北鎌尾根) L吉沢健、水科信、小林盛男、宮尾裕、越田寛、

【期日】昭和31年10月1日～10月9日

【記録】

10月1日 長野駅集合～松本～信濃四ツ谷～細野～黒菱（幕営）

計画では、八方池まで登ることになっていたが、下山して来た人によると、
上は雨とのことで、ここで幕営する。夜半から風強く吹き、雨ひどく降
る。

2日 黒菱～八方池上の雪渓（幕営）朝、雨降り続く。10時ころ回復のきざし見え、
1時ころ出発する。八方池の辺、ガス濃く、1ピッチ登った小さな雪渓の下に
テントを作り、幕営する。また雨降り出す。

3日 テント～唐松小屋～不帰岳～天狗岳～白岳～五龍岳（偵察のため往復）幕営。
宮本1人下山。パーティーは、冬期アタックの下見偵察を行う。天候回復し、
久しぶりに外で食事をする。

4日 テント～不帰岳～白岳～大遠見小屋（幕営）

5日 テント～小遠見～神城駅～大町駅（解散）～七倉（幕営）

この日で冬山偵察を終え、大町で解散とする。ここでパーティーを組みなおし、
念願であった、槍ヶ岳、北鎌尾根を末端から登攀のため、大町より七倉に入り、
幕営した。

6日 七倉～燕岳への分岐点～第五発電所～宮田小屋上（幕営）

燕岳への道や、湯股温泉から地獄谷への道など、幾つか分岐点あるが、北鎌へ
の道は一般ルートではないので、ファインディングに苦労する。しばしば偵察
に出ては、地図で確かめた。宮田小屋上から、雑木林の中が急な登りになり、
僅かな踏み跡と、木にナタ目があり、ここが取りつき点だった。

7日 テント～北鎌沢の上方コル（幕営）

終日登り。幾つかのピークを越えて、予定のコルに着く。途中、雪崩でルート
が流され、大きく迂回を余儀なくされたり、深く落ち込んでいる個所があつた
りで、アンザイレンして歩行するなどあり、予想外のアルバイトであった。北
鎌縦走のノーマルルートは、北鎌沢をつめて、このコルに出るものである。朝
から水場は一つもなく、今朝、水筒に詰めた水を大切に使う。夜のエッセンは
水なしで、パンと缶詰のみ。

8日 テント～独標～北鎌平～槍の穂～肩の小屋～殺生小屋下（幕営）朝食も乾パン、
ジャム、バター、スルメなど。途中小ピークをまく時、アンザイレンしたりす

るも、天候に恵まれ、快調に進む。処所、缶詰めの空缶に水が溜っているのがあり、先頭から回して喉を潤す。岩かけの缶の水は、冷たくてうまい。3時10分、槍の穂に裏側から登り立つ。槍沢を一気に下り、沢の水に舌鼓をうつ。夜、雨降り出す。

9日 テント～上高地～島々～松本～長野（解散）

雨の中を下る。ビニールを頭にかぶった何時ものスタイルで、膝から下が濡れ、上高地でズボンをはきかえて、下山した。

○冬山合宿

【コース】北アルプス、遠見尾根～五龍岳

（前半）遠見尾根で雪中幕営訓練と、スキー基礎技術習得。

（後半）B Cから極地法による、五龍岳アタック。

【参加者】L吉沢健、久保田寛、水科信、小林盛男、宮本幸子、河口歌子、宮尾裕
越田寛、大森晋、小野山尚、宮下常子、

【期日】昭和31年12月25日～昭和32年1月3日

【記録】

12月25日 長野駅集合～松本駅～神城駅～神城スキー場～遠見尾根登り口急坂（幕営）

冬の朝、早朝の長野駅集合で遅刻者あり、吉沢、松本駅で待ち、神城で合流したために出発遅れ、加えて前日までの豪雪で、遠見尾根登り口の急坂では、腰までもぐる軽い雪のラッセルに行程がはからず、暗くなり、予定の遠見小屋付近のB C予定地まで行けず、急坂のわずかな平地に、幕営する。

26日 テント～遠見小屋西方の平地にB C設営（幕営）

この日もラッセルが大変だった、昼頃までには到着のつもりが、午後4時頃となり、テント設営終わった時は、暗くなっていた。2日掛りで、B C予定地に到着。

27日、28日、29日 B C周辺及び、遠見尾根、白岳直下の山スキー基礎技術訓練。
B C付近での、深雪スキー練習を中心に、天候を見ては、大遠見山から白岳直下までアタック用の荷物荷揚げと、ルート作成、尾根筋での山スキー訓練、など行う。

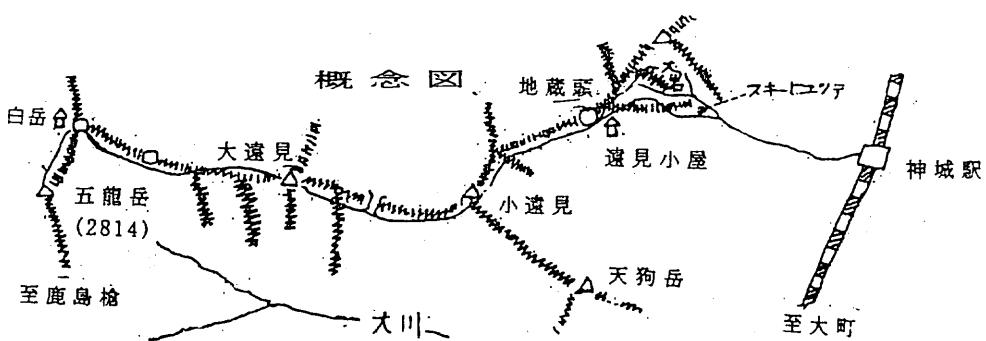
30日 女子部員3名下山。男子部員8名は、白岳直下まで荷揚げと、テント設営。

31日 AC設営。

BCにテントを1つ残し、白岳直下のAC予定地に、もう1つのテントを設営し、8人がここに移り、五龍岳アタックの工作を始める。

1月1日、2日 この両日、どのように、誰がアタックに出て、頂上に立ったか、記録なく、記憶もあいまいなるも、写真によると2人パーティで、交代で頂上に立つことができた。また白岳直下のAC近くに、東京大学山岳部が幕営しており、2日夕食後の一時、交歓会を行う。

3日 BC撤収下山～神城駅～松本（解散）



○卒業生送別スキー

【場 所】志賀高原・はす池。長野短大「山の家」

【参加者】(卒業生)田島守、坂井靖、浅野井哲、宮本幸子、高山澄子

(在学生)清水悟郎部長、吉沢健、久保田寛、水科信、田中哲夫、小林盛男

河口歌子 宮尾裕、越田寛、小野山尚、大森晋、宮下常子

【期日】昭和32年2月9日～10日

2月9日 長野駅～湯田中駅～バスで終点まで。

【所感】午後ゲレンデにてスキー。夜は、送別のパーティーをささやかに開く。

10日 山の家～熊の湯～のぞき小屋～横手山頂～山の家（昼食）

山の家～レオナード。コース～館林～湯田中駅～長野駅。

【所感】恒例の「横手山」山頂往復で、山スキーを満喫し、午後はレオナルドコースを八転しながら滑降し、春スキー気分を味わった。尚一般参加者も同行した。

○春山合宿

【コース】 神城～遠見尾根～白岳～五龍岳～八峰キレット～鹿島槍ヶ岳（往復）

【参加者】 L吉沢健、SL久保田寛、小林盛男、宮尾裕、大森晋、饗場邦光、小野山尚
(特別参加) 清水悟郎部長、田島守

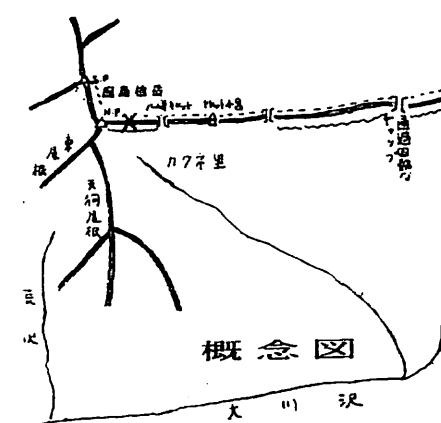
【期日】 昭和32年3月13日～3月31日

【概況】 春山合宿は、その年度の「集大成」の山行と位置づけされ、「秋山」「冬山」とも、その前哨的山行として、遠見尾根を中心として実施してきた。

そして、この合宿は満を持して、遠見小屋をB・Cとし、大遠見にC I、白岳小屋にC II更に五龍岳の先にC IIIを設定し、鹿島槍ヶ岳をアタックする計画とした。しかし北ア稜線の厳しい風雪に見舞われ、停滞が多く、アタックの日も朝のうちにwhite out (真っ白で地面と空間の区別ができない) でRoute Findingできず、前進、後退を繰り返し、大巾時間ロスとなり、結局「鹿島槍ヶ岳」北峰直下で時間切れとなり、引き返さざるを得なかった。当時目標達成できなかった「山行」は例を見なかっただけに、残念な結果となった。尚、この山行の「記録」がなく、宮尾氏、宮下さん両名の個人日誌を参照とした。

【記録】

3月13日 長野発(6:15)仲間の見送りをうけて出発、神城着(12:00)いよいよ「春山合宿」のスタートを切った。天気は良好で、神城スキー場の上まで登る、ここで幕営。



15日 今日は全員で「神城」より荷揚げをする、スキーで下った。

16日 天気良好、今日はC I設定するため、

14日 今日は、遠見小屋の前にB・Cの設定をする。天気は良好だが、ラッセルが厳しかった。BC近く迄来た時は、オーバーミトンもコチコチになっていた。



大遠見に向う。荷物デボしてB Cへ帰る。

部長、田島氏下山。

17日 吹雪となり停滯する。

18日 C I設定が順調に進む。C Iでは平らな所に雪洞を掘る。上にのると潰れるので綱を張る。結局荷物室となる。

19日 天気良好、いよいよ稜線に出る。白岳直下の急斜面を一気に登れば稜線。C IIを白岳小屋の横に設定する。



—遠見屋根より五龍岳 H 8. 5 —

20日 今日はC IIより、五龍岳を越えてC III設定の偵察に出たが、頂上付近から風雪強くヤッケも凍ってコチコチ、視界もきかず、White Out現象となり、尾根すらも判別できず、引き返す。途中五龍のコルでは、突風で飛ばされそうになり、アンザイレンして下る。

午後、サポート隊が到着した。

21日、22日 停滞。強風で凍り付いた粉雪が落ちて、居住性が最悪。小屋で拾った週刊誌も広告まで読み尽くし、「健さん」指導の「北上夜曲」や「惜別の歌」にも飽きた。ひたすら我慢の連続だ。夜になると誰かが言う「また寝るだか！」と。稜線の風雪は厳しく、寒さが一段加わり、皆膝を抱いて耐える。

23日 ようやく吹雪収まる。長かった停滯が終わって、今日は五龍岳の先のコルに、C IIIを設定する。これをA Cとして、久保田、小林、宮尾、大森の4人が入り、吉沢、饗場、小野山はC Iへ引き返す。アタック準備が完了した。

24日 停滞、C IIにも増して、厳しい停滯となった。このコルはC IIより遙かに風雪強く、悲惨だったのは、命綱のラジウスが不調に陥ってしまった。不完全燃焼で、青火にならず、油煙で、テントの中も衣類も真っ黒になる。止まらないかも知れない吹雪で、不安増す。

25日 エッセン当番が3時に起床したが、吹雪だったので再眠した。ところが吹雪が収まった。ソレとばかりに、アタック準備（1時間遅れ）。久保田、小林が出発。宮尾、大森は連絡係で残る。出発もなく、ガスのためWhite outとな

り、Route Findingが出来ない。この辺は、信州側は雪庇の連続なので、どうしても飛騨側に下降してしまう。引返しては又進むことの繰り返しを、1時間以上やった。(雪庇と思っていたのは、晴れて来て見たら単に雪田の壁だった) やうやく八峰キレットのアップザイレンが済み、北峰の登りに掛かった時は、既に12時だった。出発前に、留守隊に「遅くも5時までには帰る。帰らねばアクシデントと考えよ」と言ったことがブレーキとなってきた。まだ主峰の南峰までは、1時間以上要するが、5時帰着のギリギリ時間となってしまった。又暖をとる唯一のテルモスが割れて、中が氷になってしまった。ポケットの乾パンも、残り少なくなった。断腸の思いで「引き返し」を決断した。帰ってくると案の定、宮尾が迎えに、大森がC IIへと、行動開始したところで、呼び止めて、事なきを得た。

- 26日 また吹雪で停滞。2時間ごとに交替でテントのラッセルすると、両手の指先が無感覚で白くなる。ラジウスの調子も悪く、最も不安になったのは、食料が無くなってきたことだ。1食毎に半減で食い延ばしとし、とうとう1食1人モチ1枚ずつで我慢した。
- 27日 天気は回復したが、ラジウス不調、食料不足で、これ以上C IIIに留まれず、撤収を決断し、C IIへ戻る。この日C IIより2名下山した。
- 28日 停滞
- 29日 せめてもの思いで、小林、宮尾が、不帰III峰とII峰を往復した。
- 30日、31日 C II、C 1撤収し、「鹿島槍」に未練を残しつつ、帰路につく。
目標達成出来なかったことへの反省と、この敗北感は、後々まで尾を引いて残った。

(久保田寛記)

1957年度（昭和32年度）

1957年度〔年次計画〕

- I 新人歓迎合宿……北アルプス・常念岳〔登山の基礎修得及び雪上訓練〕
- II 夏山合宿…………白馬から北穂高岳〔全山縦走による体力養成〕
- III 秋山合宿…………涸沢定着合宿〔尾根歩きと登攀基礎技術の修得〕
- IV 冬山合宿…………八方尾根から唐松、五竜岳〔厳冬期登山の基礎訓練〕
- V 春山合宿…………小日向尾根から不帰嶺。唐松〔極地法による積雪期登山〕

VI 卒業生送別スキー……志賀高原にてスキー。

【女子部】VII 新人歓迎合宿…………戸隠連山〔登山の基礎修得〕

VIII 夏山合宿…………針ノ木～穂高縦走〔全山縦走による体力養成〕

IX スキー合宿…………志賀高原〔本戸池、発哺、熊ノ湯でのスキー練習〕

◆ 新人歓迎山行

○ 常念～燕 縦走

【ルート】長野～柏矢町～一の沢～常念小屋⇒常念頂上～大天井岳～燕山荘⇒燕頂上～合戦小屋～中房温泉～穂高～松本

【期間】昭和32年4月27日～30日（4日間）

【参加者】L小鉢盛男 久保田寛 宮尾裕 越田寛 大森普

〔新人部員〕池田孝雄 中田邦男 柳沢勝輔 丸山孝 小野義郎 中沢俊夫

【記録】

4月27日 晴 長野発6:15～柏矢町

9:30～テント設営（一の沢山荘の上部）3:30

4月28日 晴 キャンプ発7:30～出合11:00～常念小屋12:00～常念岳2:55～常念小屋着3:20テント設営。雪上訓練〔ザイルテクニックとグリセード〕〔久保田先輩、学校都合もあり、明日下山、夜お別れ会を開く。〕

4月29日 晴 キャンプ発7:15～大天

井岳10:15～燕山荘3:00⇒燕岳発3:40～合戦小屋（テント設営）4:30

4月30日 晴 キャンプ発7:00～中房9:15～松本5:25～長野7:09

【所感】4日間、決晴に恵まれ下山途中、合戦小舎上部で柳沢のスリップなどあったが、快調な歓迎登山であった。往きの松本駅で、中沢の駅そば早食い新記録が生まれた。
〔この項、一部故中沢氏の記録による。〕

◆ 夏山合宿

○ 後立山全山縦走（白馬～穂高）

【ルート】信濃四ツ谷～猿倉～大雪渓～白馬岳～杓子岳～鎧が岳～不帰キレット～唐松



—常念頂上からの穂高連峰 H 4. 7

岳～五龍岳～鹿島槍～爺が岳～スバリ岳～針ノ木峠～蓮華岳～船窪～鳥帽子岳～野口
五郎岳～鷲羽岳～三俣蓮華～双六・槍が岳～大キレット～北穂高山頂～奥穂高岳～吊
尾根～前穂高岳～岳沢～上高地～島々～松本

【期 間】昭和32年7月15日～8月6日（22日間）

【参加者】L小林盛男 吉沢健 水科信 宮尾裕 小野山尚 柳沢勝輔 祐津直行
丸山孝 小野義郎 中沢俊夫 柳沢雅邦 竹内利夫 ●【後発隊】L久保田寛
越田寛 大森晋 池田孝雄 中田邦夫

【記 錄】

7月15日曇～夕立 長野発 6:15～松本

発 8:27～大町発 10:35～信濃四ツ
谷 12:00～猿倉 1:00～キャンプ着
4:05（馬尻小舎の上部に幕営）

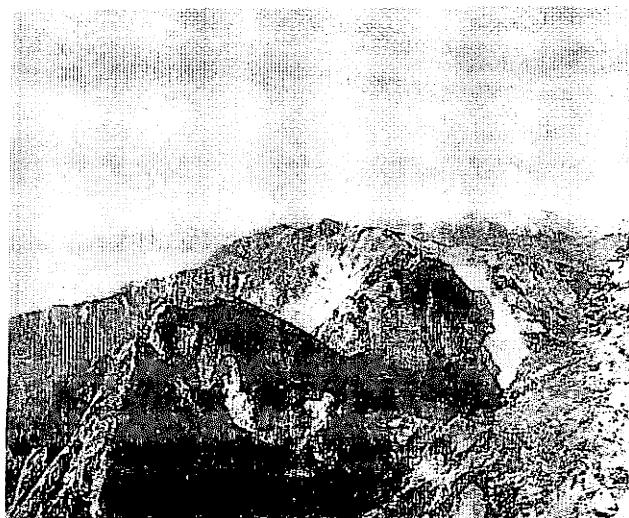
【所 感】長旅の全食料、全装備を背負
う時速3キロメートルの蜗牛ピッチ
はのろのろで、荷の軽いリーダー連
は後の方で盛んに眠い眠いとぼやく。
1年部員は新調の、大きく重いキス
リングを背負つて出発時、ひつくり
返ったり、トレーニング不足も手伝
つてか、足の痙攣など起し、とかく
遅れがち。

7月16日曇～雨 キャンプ発 8:45～小雪渓～葱平 12:22〔エッセン〕小雪渓でグリセードを楽しむ。葱平発 1:25～キャンプ着 3:40
(村営小屋付近で幕営)

7月17日曇 キャンプ発 8:35～杓子とのコル 9:25～白馬鎧のコル 10:05〔エッセン〕
発 12:45～鎧頂上 1:35～天狗の池 2:30テント設営

【所 感】水場の関係で、天狗の池までの楽な行程だった。途中、鎧の手前のコルで十分
にグリセードの練習。

7月18日時々小雨 キャンプ発 8:30～天狗の頭 9:35～天狗のコル 10:30～不帰P₁ 10:
55～P₂ 11:35～P₂・P₃のコル〔エッセン〕 1:35～唐松頂上 2:40～唐松小屋 3:
15～白岳小舎 6:30（幕営）



白馬頂上から杓子・鎧・鹿島槍 H 8. 8

【所 感】 昨日にはほぼ倍する行程、不帰の嶮などあり、唐松小屋を経てから小雨にたたかれたり、今合宿初の強行であった。

7月19日終日雨 停滞。昨夜半から木降りになりだした雨は止まず、風も加わって飛騨川側から吹き上げ、視界もきかず沈殿と決める。朝のエッセン当は雨の中で火の焚き付けに涙を流す。テントの中で「北上夜曲」を祢津、柳沢に教わり盛んに歌つて暮れる。午後、小屋前下の雪渓で雨中グリセード練習。

7月20日終日雨 停滞

依然として雨止まず、風は益々つのり再び沈殿と決定する。単調な毎度おきまりのコンブの佃煮とコンブの味噌汁にへきえきし、“紫色の髭が生える”などと冗談を言いながらも食量係への風当たりが強い。夕方から風増々募り、木製のテント支柱が折れ、貧弱な装備に泣く。副木を当て補強した。テントを飛ばされる危険もあるので交代で寝ずの番とする。

7月21日終日雨 今日も雨止まず、停滯と決める。沈殿も三日目となると何をしても退屈である。中沢、紙の駒を造り2、3人と将棋を指し気晴らしをする。午後3時頃、復調の兆しが見え始め、運動を兼ねて五龍岳へ往復する。

7月22日曇～雨 キャンプ発6：30～五龍岳頂上7：00～キレット小屋手前12：20〔エッセン〕発12：55～キレット小屋1：20～吊尾根3：30～鹿島槍頂上4：10～冷池6：20（幕営）

【所 感】 4日ぶりの行動であった。3月の春山合宿【目標：鹿島槍積雪期登頂】のA・C跡をたどり、感概を新にする。どうにか持ちこたえられそうだった天候もキレットを通過する頃したたか土砂降りになり、全員再び濡れねずみとなった。行動も思うにまかせず、テント場に着いたのが遅く、消耗気味で元気がない。

7月23日小雨～曇 キャンプ発6:00～爺岳頂上1:00～種池小屋1:50キャンプ

【所 感】 朝方雨が残っており出発を見合わせたが、快方に向かう兆しが見えたので出發した。幕営してから、立ち本を切つたの切らぬのと小屋の番人といさかいがあった。夕方から、天気回復もようで、星がちらほら、偃松の中、シュラフで寝た者がいた。)

7月24日曇 キャンプ発6：00～赤沢岳頂上10：00～鳴沢岳頂上11：20〔エッセン〕発12：25～スバリ頂上2：05～針ノ木岳頂上3：20～針ノ木小屋4：35（幕営）

【所 感】 久しぶりに薄日の当たる一日であったが今まで雨にたたかれた為に全員消耗が激しい。清水部長、女子部員3名と饗場合流する。夜のエッセンはやや華やいだ。

7月25日曇時々晴 キャンプ発6：00～蓮華の頭7：00～北葛岳11：00〔エッセン〕発

12：20～船窪小屋 2：05キャンプ

【所 感】起伏の激しいガラ場など、いたる所にある行程で、思いの外手間取る。船窪は水量豊富な水があり、さわやかである。夕方から再び雨が降り始めた。

7月26日曇～小雨 キャンプ発 6：00～船窪小屋からの下りで中沢スリップ、軽傷を負う。

〔水科の付添いで、折から下痢腹の激しかった柳沢（雅）と下山をする。吉沢、小林、小野山、残って事後処理。〕本隊出発 9：00～不動岳登りのコル10：10～不動岳頂上
11：30～キャンプ地着 1：30（幕営）〔後発隊を待つ 4：00合流〕

【所 感】小屋からの下り、片側がガレでいて、べと地の滑り易い道で、中沢スリップし、ザラザラした45度ほどの斜面を20メートルほど転落、足その他に摩擦傷を負った。アルコール消毒をし応急処置をして下山させる。雨の中、キャンプ地までを歩く道は、2、3日続いた雨降りの上、折からの雨での泥んこ道で、それにしてもひどく、北アルプスの稜線にもこんな道があるかと驚かされた。夕方、再び、ぐずつき、事故も相まって皆気分は重い。

7月27日雨 キャンプ発 1：00～烏帽子田園 2：50～烏帽子小屋 3：00（幕営）

【所 感】朝方雨で出発の出鼻をくじかれる。結局、午後から出発と決める。

7月28日曇～雨〔記録不明〕野口五郎にて幕営

【所 感】朝方天候は曇りであつたが出発後、一ピッチする頃、相当の風を伴って、雨が降り始め、進むほどに嵐は激しさも加え、これ以上進むのは危険と見て野口五郎岳で風をさけ幕営する。台風の襲来らしく風で潰された、無人テントなどあり無気味であった。夜明け方から風止まる。

7月29日曇 キャンプ発 8：40～赤岳登り10：40～赤岳・水晶岳分岐点10：50～鷲羽岳登り11：45～鷲羽岳頂上12：15～三俣蓮華小屋 2：00～雪渓 2：35（幕営）

【所 感】久しぶりに日の目を見、例の三俣蓮華の雪渓の下の快適なキャンプサイトで濡れ物を干し、トカゲをする。上級部員は豪快にグリセードを楽しんだ。連日雨に打たれて胃腸をこわし、下痢を訴える者、2、3人あり。

7月30日曇～雨 キャンプ発 6：00～双六小屋 7：20～樅沢岳下り 8：00～槍肩の小屋
11：20エッセン〔肩の小屋診療所で柳沢、竹内等診察を願う〕小屋発 1：00・中岳水場 2：30（幕営）

【所 感】西鎌尾根にとりかかる頃から雨が降り始め、肩の小屋についた頃は雨しきり。

仕方なく小屋を借りてエッセンとする。槍ヶ岳の慈恵医大診療所での診断結果、竹内は足首捻挫で下山を勧められ、槍にて下る予定だった宮本と共に下山する。

〔柳沢は大腸カタルとのことだったが、頑張って本隊と行動を伴にする〕

7月31日晴 キャンプ発 7:30～南岳

9:00～キレット 9:30〔エッセン〕

発12:30～北穂小屋着 4:30幕営

〔北穂高岳北峰頂上でのキャンプについてはファーリア会等あり特別許可。〕

【所感】キレット通過時刻が他パーティーの縦走時間帯でキレットは混雑した。北穂の上り口で昼食。他のパーティーをやり過ごし、落石をさけて行動に移った。

8月1日晴〔尾根歩き〕テント発 9:30～
グリセードで北穂沢を下る～南稜出合
10:30～涸沢11:40～北尾根 P₅・P₆
のコル 1:20～P₅・P₄のコル 2:00

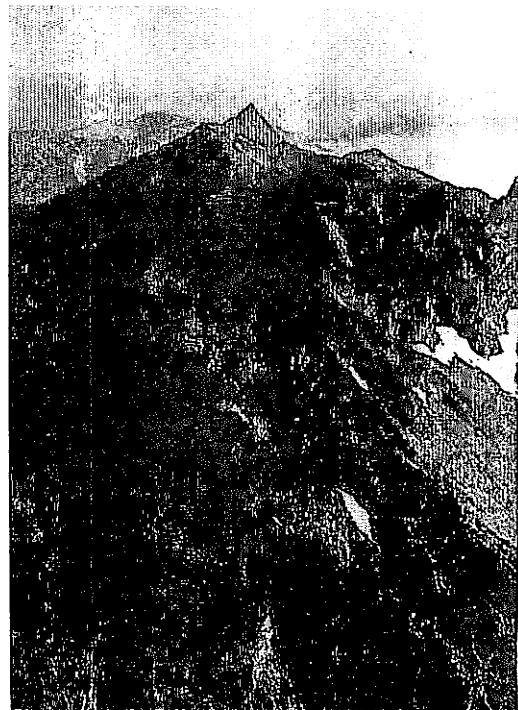
4峰 2:20～3峰 3:00～2峰 3:05～前穂頂上 3:10～奥穂 5:00～北穂テント着
6:15。北穂高頂上キャンプサイトで針ノ木から入った、久保田以下5人の後発隊と合流する。柳沢（勝）体調悪く、河口、宮下と共に上高地へ下山。

【所感】最後の一日が快晴に恵まれ、明日から恒例のファーリア会になるので事実上、今日で合宿は終了。終始雨にたたられ、負傷者もでた合宿であったがともかく計画通り終了することが出来た。一方、針ノ木から入山した後発隊も距を伸ばし放題の逞しい顔で予定通り、計画を終了できた。夜、ささやかなパーティーを開く。

8月2日晴 ファーリア会登山者を迎えて上高地にそれぞれ下る。本谷一横尾隊、奥穂一岳沢、西穂まわりで下る隊などいろいろ。

8月3日晴【ファーリア会】上高地発 6:30明神池 7:20～奥又の出合 10:30～横尾
11:30～本谷出合 12:45〔エッセン〕発 1:25～涸沢 3:00～北穂小屋着 6:20

8月4日晴 北穂小屋発 6:45～涸沢岳頂上 9:00～奥穂頂上 10:15～前穂下り口 12:20
〔エッセン〕発 1:10～水場 2:40～上高地バス停留場着 4:40バス満員で乗車不可能ゆえ分校のテントで1泊する（この記録一部、宮尾氏の記録による。）



—奥穂頂上より北を望む—

◆【夏山山行】（後発隊）

【ルート】大町－大出（バス）～扇沢～針ノ木岳～蓮華岳～船窪岳～鳥帽子岳～野口五郎岳～鷲羽岳～三俣蓮華岳～双六～槍ヶ岳～キレット～北穂高岳～西穂高岳～岳沢～上高地～島々～松本

【期間】昭和32年7月25日～8月3日（10日間）

【参加者】L久保田寛 越田寛 大森晋 池田孝雄 中田邦夫 OG宮本幸子

本隊は7/15より北アルプス全山縦走を行なったが、教育学部より夏休みが10日遅い工学部の部員と、教育学部で教育実習にあった部員で後発隊を結成し、途中の「針ノ木岳」より入山し、北穂で合流した。

【記録】

7月25日 長野～大町～大出（ここまでバス）大沢出合（幕営）

参加者5名、全員2年生以上でパーティーのバランスがよく、快調に進んだ。

7月26日 大沢出合～針ノ木小屋（針ノ木岳 往復）

雪渓は中間部が切れており、水が川となって流れている。途中水を飲むのを禁止していたので誰かが腰から手拭を長く垂らし、水の中を引きずって、たくし上げ口に含んでいた。喘ぎながら小屋にたどり着き、小屋の主人 百瀬美江さんに挨拶。

7月27日 針ノ木～蓮華岳～北葛岳～七倉岳～船窪小屋

（幕営）雨の中の行動で、激しい上り下りで足をとられ、スリップした者が多かった。

7月28日 雨で停滞

7月29日 船窪岳～南沢岳～鳥帽子岳～小屋（幕営）

森林帯まで下つて又登る。足場も悪く消耗が激しかった。汚い水だが鳥帽子の池をみてホッとした。

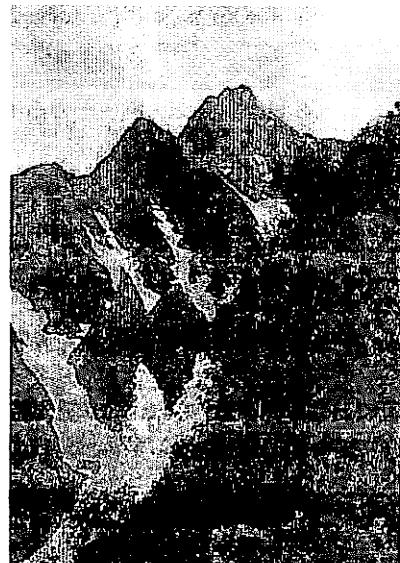
7月30日 鳥帽子小屋～野口五郎岳～鷲羽岳～三俣蓮華（幕営）。天気も良く快調に進む、鷲羽の下りは足がガクガクくる。三俣蓮華ではグリセードの練習

7月31日 三俣蓮華～双六～槍ヶ岳～中岳（幕営）。

天気良く快調に進む。槍までくると急に人が増える。

8月1日 中岳～キレット岳～北穂高房。（幕営）

キレット越えは時間を費やす。北穂で本隊と合流。



—南稜より前穂・北尾根—

8月2日 北穂高～奥穂高岳～ジャンダルム～西穂沢～岳沢（幕営）。ジャンダルムの登りで落石のため池田が指先を潰す。応急手当して西穂沢を下る。雪渓が短く長いブッシュ漕ぎとなる。池田の指は痛んだようだ。

8月3日 岳沢～上高地

池田は上高地診療所で手当をうけ下山、その他はファーリア会に参加。

◆ 秋山合宿

○秋山偵察山行・涸沢定着合宿

【期 間】 昭和32年10月1日～7日（7日間）

【参加者】 L宮尾裕 越田寛 池田孝雄 中田邦夫 丸山孝 中沢俊夫 蒔田修
宮本範子 中村和美

【記 錄】

10月1日 曙 長野駅発 6：15～松本 8：20～島々 9：20～上高地 11：40 エッセン発 1：00
～横尾着 4：00 岩小屋付近にてキャンプ

【所 感】 ガスの切れ目から望まれた新雪をかぶっている奥穂高。河童橋の奥の土橋の付近で昼食。もう紅葉し始めている明神岳側の灌木を眺めながら明神館前を経てつり橋を渡り養魚所から横尾河原に出て横尾へ。横尾の合流点より更に30～40分の森林帯の切れた河原に出会い所にてテントを張る。ガスが濃くなって岩肌を白く包んでいる雪の峰々も漸次ガスの中に消えて行った。アーベンロートが美しかった。

10月2日 快晴 キャンプ発 6：50～涸沢着 9：40

【B C】 設営

10月3日 朝方降雪、風強く稜線は雪煙が立つ

A. B 2隊に分かれて尾根歩き

● A隊（宮尾、丸山、中田、中沢、宮本、中村）

◇ B C 発～東稜～北穂高～涸沢岳とのコル～ザイテングラード取りつき～B C着

● B隊（越田、池田、蒔田） ◇ B C 発 6：50

～ザイテン～穂高小屋 8：20～奥穂頂上 9：15～ロバの耳 10：30 エッセン発 11：15～
奥穂高岳 11：40～涸沢岳、涸沢槍のコル～B C着 1：55

【所 感】 A隊はゴルジュの右手をつめ滝の上に出て大変下部から尾根に取り付いてしまった。雪が5～10cm程残つているのでハイマツを求め、女性も加わっていたのでザイルをフックスしてひきあげ、東稜の最後の頭はキレット側に深く廻り込んで夏道の縦



-北穂頂上- 東稜を登ったA隊

走路を見つけて北穂にでる。北穂小屋では立命館大学山岳部の人と、頂上では信州大学文理学部山岳部の人に会う。奥穂へのB隊はロバの耳のクサリ場に到達したが雪が岩に残って完全にクサリが埋まっていて、ザイル無しでは手強かったとの事。

10月4日晴～曇 ◉A隊（宮尾、丸山）◉B隊（宮本、中村）◇BC発6:40～ザイテン取付7:30～穂高小屋8:20～奥穂頂上9:10 ◆A隊のみ行動～ジャンダルム頂上10:30～奥穂頂上11:30B隊と合流、エッセン発12:00～涸沢岳のコル1:40～BC着3:00

◉C隊（越田、池田、蒔田）◇BC発6:40～東稜取りつき7:50～スノーコル9:20～北穂小屋10:10（エッセン）発10:40◆滝谷第二尾根へP3下り12:00～P3下部取付点1:40～P1着2:50～登攀完了3:15。北穂小屋3:30～南稜を経てBC着4:30。

◉D隊（中田、中沢）◇停滞。

【所感】A隊 ロバの耳のクサリ場は前日の越田パーティが掘り出してあったのでコルにハーケンを打ち込みビレーをして登る。夏道では草付の水平バンドの個所は雪で埋まっていて、いちいちステップを切ってstep by stepにてトラバースを行って登攀。奥穂よりジャンの頭迄に1時間30分費やした。女性二人は吊尾根を経て前穂迄の行程。10月5日晴～ガス ◆次の4隊に分かれ行動

◉A隊（宮尾、中田）◇奥穂、ジャンダルムへ ◉B隊（越田、中沢）◇前穂高岳へ
◉C隊（宮本、中村）◇屏風の頭へ ◉D隊（池田、丸山、蒔田）◇停滞

10月6日曇～雨、嵐強し

◉A隊（池田、中沢、蒔田）◇BC発6:00～穂高小屋7:20～奥穂高頂上8:00～ロバの耳、馬の背のコル9:35～ジャンダルム頂上9:10～奥穂高頂上10:00～BC着11:30 ◉B隊（丸山、中田）◇BC発6:15～穂高小屋7:30～奥穂高頂上8:00～前穂高岳頂上9:00～BC着11:30

◉C隊（宮尾、越田、宮本、中村）◇停滞

10月7日雨～曇〔下山〕涸沢発6:45～本谷7:50～横尾8:40～奥又白谷出合9:20～新村橋9:40～養魚所10:50～河童橋11:35～上高地発1:50～松本発6:40～長野8:30

〔この項の記録一部宮尾裕氏の記録によった〕

◆ 冬山合宿

○ 北アルプス八方尾根から唐松越え～不帰嶮・五竜岳アタック

口目的 厳冬期、国境稜線での行動を通じて、アイゼン・テクニック、ザイル・テクニックを修得し、極地法による登山活動、並びに春山縦走の基礎訓練とする。

【ルート】信濃四ツ谷～細野～黒菱平BC】=中継キャンプ \Leftrightarrow C1 \Leftrightarrow 不帰嶺・五竜岳頂上

【期間】昭和32年12月25日～昭和33年1月5日（12日間）

【参加者】L小林盛男 S・L久保田寛・宮尾裕 越田寛 中田邦夫 大森晋

柳沢勝輔 蒔田修 丸山孝 池田孝雄 小野義郎

●【後発隊】祢津直行 中沢俊夫 O B田島守

【本部】信州大学教育学部、同工学部厚生補導課

【連絡場所】〔山岳部宛〕長野市妻科信大教育学部あけぼの寮内 吉沢健

〔登山隊宛〕北安曇郡白馬村細野 丸山竹雄方 信大山岳部

【記録】

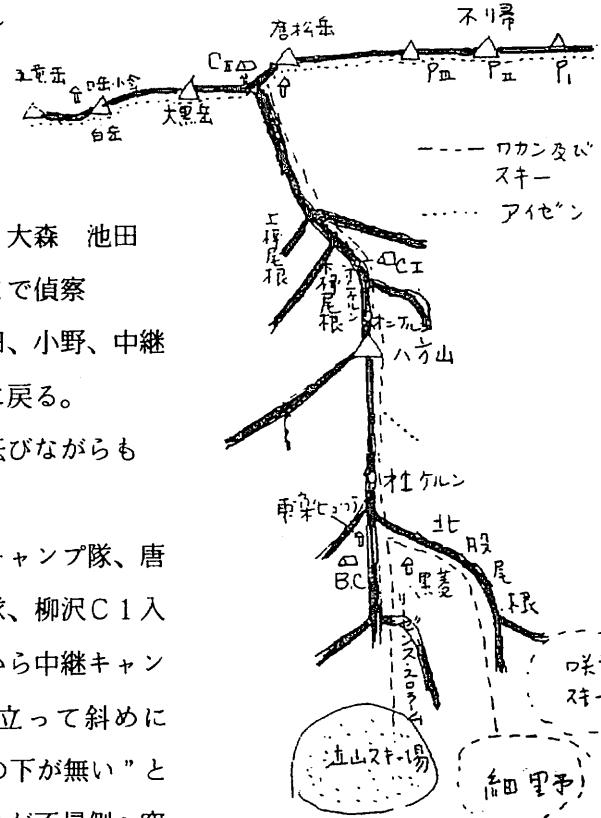
12月25日雨～雪 大町南高校に集結

概念図

八方尾根

12月26日 大町～信濃四ツ谷～細野～

BC黒菱小舎上方に設営



12月27日 BC～第一～三ケルンを

経て岳樺林上方に中継キャ

ンプ設営◆久保田 宮尾 越田 大森 池田

中継キャンプ泊 唐松小舎下方まで偵察

◆小林、中田、柳沢、丸山、蒔田、小野、中継

キャンプ設営をサポート。BCに戻る。

第一ケルンにデポしたスキーで転びながらも

楽しみながら下る。

12月28日 午後、吹雪となる◇中継キャンプ隊、唐

松小舎近くにC1設営。◇小林隊、柳沢C1入

りをサポートBCに帰着。BCから中継キャン

プへスキーで向かう途中先頭に立って斜めに

登っていた小野、突然“スキーの下が無い”と

声を出す。見ると先端三分ぐらいが不帰側へ突

き出していた。なほ帰路でも第一ケルンからス

キーで滑りおりる途中、崩沢側へ下り過ぎ、戻るのに往生した。視界が利かない時、

スキーでの下りはボーゲン等で慎重に下るべきと反省。

12月29日吹雪 ◇C 1隊停滞。B C隊C 1往復。◆柳沢B Cに下り◆中田C 1に入る。

夕方近く猛烈な吹雪となり、下降路は判別できず苦労する。蒔田、靴ごとスキーが外れるハプニングあり。

12月30日雪ひどく降る B C隊、◇C 1隊ともに停滞

◆丸山、柳沢、下山 ★後発隊 祐津・中沢・田島OB、B C入り、B C賑やかとなる。

12月31日吹雪 B C隊、C 1へ向かうも風雪ひどく第二ケルンからひき返す。

◇C 1隊 停滞

1月1日晴れ～風雪 B C隊、C 1往復。C 1隊

◆久保田、越田、池田、中田、五竜往復

◆宮尾、大森、不帰第II峰往復。◆田島

OB、CI入り

1月2日風雪 B C隊C 1に向かうが風雪強く、

胸までのラッセルにやむなく引き返す。

◇C 1隊 停滞

1月3日雪、積雪3m B C隊、小林、小野、
祐津スキーで登るも、ラッセルひどく第二ケ
ルンより引き返す。◇C 1隊、食糧乏しくな
り、撤収し下山にかかるも、風雪ひどく唐松
小舎に避難する。

1月4日B C隊偵察にでかけ、第一ケルン付近で

－ベースキャンプにて－

下山中のC 1隊と合流B Cを撤収して下山。C 1隊、B C隊と合流後同一行動。細野
～信濃四ッ谷～松本～長野

【所感】冬山特有の風雪に見舞われ、サポート隊は意外に苦しめられた。いつものこと
ながら貧弱な装備で、国境稜線上にまでワカンジキで行動したり、3mに余る新雪に
なわシールを巻いてラッセルするなど、泣かされた合宿であった。天候にも恵まれず、
剣岳では法政大学隊が、この八方尾根でも3、4名の遭難者を出したほどで、我々の
パーティーでも足指に軽度の凍傷をうけた者もあった。それにも負けず、当初の目標
を達成し、国境稜線上の行動を数多くの部員が経験できたことは大いに成果があった
と言える。



〔この項の記録一部中沢俊夫氏と柳沢勝輔氏の記録によった。〕

◆ 志賀高原送別スキー

○ 志賀高原信大ヒュッテ

【期間】 昭和33年 2月1日～2月2日

【卒業生】 吉沢健 久保田寛 水科信

【参加者】 清水悟郎部長 小林盛男 河口歌子 大森晋 宮下常子 小野義郎 丸山孝
祢津直行 宮本範子 中沢俊夫 中田邦夫 池田孝雄 吉沢信平

◆ 春山合宿

□目的 極地法により、高所露營、稜線上の行動、アイゼン、ザイル、ビックル技術の向上を目指し、1957年度（昭和32年度）積雪期登山の総決算とする。

○ 北ア、小日向尾根から杓子、不帰嶮を経て唐松岳並びに白馬主稜から白馬岳アタック。

【ルート】 信濃四ッ谷～細野～猿倉～小日向のコルB C ⇄ 双子岩C 1 ⇄ 双子尾根 ⇄ ジャンクションC II ⇄ 天狗の池A C ⇄ 不帰嶮・唐松岳頂上

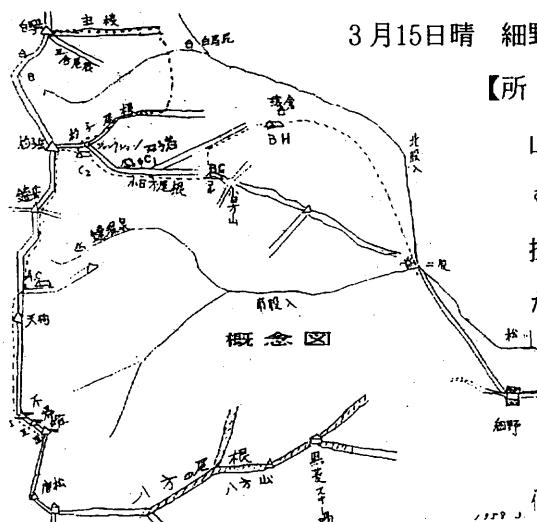
【期間】 昭和33年3月14日～4月2日（20日間）

【参加者】 L小林盛男 S・L宮尾裕・大森晋 蒔田修 丸山孝 小野義郎 町田金四郎

【記録】

3月14日晴 長野～松本～信濃四ッ谷～細野

【所感】 松本 8:15分の上りで、今日伊那に帰る予定の吉沢先輩が一緒に来た。小野が遅れたので宮尾、丸山が待つことにし、大学本部にウインパー、松本工業高校にはアイゼンを借用に行った。大町で大森、莢田が遅れたので信濃四ッ谷で待ち、夜は細野 [登山隊連絡場所] の丸山竹雄家に宿泊。



3月15日晴 細野～猿倉小屋B H設営

【所感】 予定より40分（6:40）遅れで丸山家を出発。快調のピッチ、途中昼休みもたっぷりとり、白馬主稜へのルートも探す。猿倉小屋下で道が、新しく造られた猿倉荘の方向についている為、見当が付かず、L宮尾大森で偵察。矢張り一昨年の記憶どうりだった。夕方雪がちらつき心配の合宿1日目だった。

3月16日快晴L、宮尾、丸山猿倉BC⇒小日向のコルBC建設の準備ボッカ隊、大森蒔田、小野、町田BH⇒細野 荷上げ

【所 感】昨夜の雪はわずか。建設隊は小日向のコルで雪洞掘りとテン場作り。快晴の天候のもと、裸で日光浴しながら昼食。雪が“腐っていて”ずっぽりずっぽりワカンがもぐったが僅か1時間ばかりで猿倉に下る。17時を過ぎてもボッカ隊が戻らないので宮尾、丸山で迎えに行く。その間、夜の食事用意を小林がする。全く久しぶりだ。

「焚火」で飯を作る。

7時半頃荷物を少々持つて帰つて来た。途中デボッたとのこと。

3月17日晴～曇 ◇A隊L宮尾、小野BC入り後、

宮尾、小野で偵察 9:50～2:00

◇B隊、大森、丸山、蒔田、町田BH⇒デボ

BH⇒BC荷上げ

【所 感】雪がクラストしておりBCへのアプローチは快適だった。11:45分頃B隊BCに到着。テントを張り雪洞に荷物をいれ、偵察から帰つて来た宮尾達と入れ替わりに4人はBHに下った(13:00)。空模様が変わってきて夕食(17:00)には遂に雪になった。



3月18日雨～吹雪 ◇BC隊 停滞 ◇B隊 大森

丸山、蒔田、町田BH⇒BC入り

【所 感】朝3時頃は雨、5時にエッセン。雪洞の雨漏りがすごいので6時15分頃より雪洞、テントの整備後休息。12:15分4人上がって来てBC建設が完了。4人がテントに寝たのでものすごく窮屈。八時頃全員しずむ。雪になり風がものすごく出てきた。

3月19日曇：風強し ◇全員で双子岩にCⅠ設営 ◇A隊、宮尾、丸山CⅡ入り ◇B隊大森、蒔田 A隊をサポートして帰る。◇C隊、L. 小野。町田BC⇒CⅠ荷上げ。

【所 感】2時～3時頃風が出てテントが飛びそうだった。予定を変更、双子岩にCⅠを設営。吹溜りはラッセルがとても大変で他のパーティが千葉大と共に我々の後に続いた。

◇C隊 L. 小野 町田先にBCに帰り雪洞掘り。エッセン計画表を検討するとだいぶ多過ぎるのでリーダーと大森で話し合い修正した。小野が夕食作り、三人で他の雪洞掘り。

3月20日 ◇A隊 宮尾。丸山でCⅡへのルート偵察 ◇B隊 L. 蒔田BC⇒CⅠ入り

◇C隊 大森、小野、町田B C ⇄ C I 荷上げ。

3月21日 ◇A隊 L. 宮尾。丸山、蒔田C I ⇄ ジャンクションC IIに荷上げ ◇C隊 大森。小野、町田B C ⇄ C I へ荷上げ

3月22日 ◇A隊 宮尾、丸山C I ⇒ C IIへ荷上げを兼ねC II入り ◇B隊 L. 蒔田 C I ⇄ C II A隊のサポートと荷上げ ◇C隊 大森、小野、町田B C ⇄ C I に入る

3月23日 ◇A隊 宮尾、丸山荷上げを兼ねルート偵察 C II ⇄ 天狗の池付近 ◇B隊 小林、大森C I ⇒ C IIに。◇C隊 蒔田、小野、町田C I ⇄ C II B隊のサポートと荷上げ

3月24日 ◇A隊 宮尾、大森C II ⇒ A Cに入る ◇B隊 小林、丸山 C I ⇄ A C A隊をサポート A C設営及び荷上げ ◇C隊 蒔田、小野、町田C I ⇄ C II へ荷上げ 小野C II 入り

【所 感】10日目にしてアタック体制が整った。小林、一昨年の先輩との山行記憶を蘇らせつつ杓子岳直下のリッジを下り、明日の天候に望みをたくした。

3月25日 アタック隊 宮尾、大森A C ⇄ 不帰嶺・唐松岳頂上 ◇B隊 L. 小野 杓子尾根偵察 ◇C隊 蒔田、町田C I ⇒ C II。
丸山、町田C II ⇒ C I に帰る 蒔田C I 入り

3月26日 ◇A隊 宮尾 大森A Cを撤収 ⇒ C I へ ◇B隊 L. 蒔田C II ⇄ A C A C撤収をサポート ◇C隊 丸山、町田C I ⇄ C II 往復、小野C I に下る。



—遠方に五龍・鹿島槍を望む—

3月27日 晴～曇 ◇A隊、宮尾、大森白馬主稜から白馬アタック。◇C隊、丸山、小野、町田。C I ⇒ C I。蒔田。町田 ⇒ C I へ下る。◇D隊、L. 丸山、小野C I ⇄ 白馬岳頂上。

【所 感】12時30分起床。蒔田がエッセンを作り、出発2時35分。6時半頃の状況からアタック不成功の予感あり、二人は再び杓子尾根を上がって来た(10時50分)。主稜に取り付く前に大雪渓の氷の壁をピッケルだけでは乗り越えられず登撃を諦める。午後小林、丸山、小野で予定の白馬頂上に行つて来た。天候は崩れ気味だ。3人で2つのシュラフに入る。

3月28日 曇時々雪 C II隊 C I隊 停滞

【所 感】2時頃“雪”との声で再び眠り6時30分に起床。雪は降っていないがガスが濃い。白馬は見えるが停滞としテント周りの整備をした後、4人で色々と議論をしてす

ごした。

3月29日雪 ◇C II隊並びにC I隊 停滞。

3月30日◇C II隊。L. 宮尾、大森、丸山、小野C IIを撤収してB Cに下る。

◇C I隊、蒔田、町田C IからC Iに登って来て合流し、下る途中にてC Iを撤収し全員でB Cに下る。

【所 感】◇C II隊が下る途中、C I隊が出発し小日向尾根の下部から少し登った所でハプニングがあった。尾根を先頭で登っていた蒔田の足下から、昨日積もった雪が真っ二つに割れて雪崩が発生したのだ。後ろの町田、ピッケルで確保し前方を見ると横つ跳びの蒔田、ピッケルで身を支え難を避けた。下山途中、これを上方で見ていた宮尾、丸山達も肝を冷し、遅れておりてきたリーダーも後で様子を聴いてホッとした一日だった。

3月31日 停滞

4月1日曇～晴 ◇登山隊、小日向のコルB C撤収⇒猿倉B Hへ下る。

【所 感】 ガスと雪で天候が悪かったが意を決して下山とした。雪崩が起きそうな二ヶ所を無事通過してほっとし後はラッセルに終始。リーダーはアイゼンで他は皆ワッパ、早く猿倉B Hに着いたがその他の状況が判らないので小屋泊まりとした。3時に夕食、5時頃からお別れパーティ。リーダーは一言「良くやってくれた。主稜は又の機会に残す。」

4月2日晴 下山 猿倉～細野～信濃四ッ谷～松本～長野

【所 感】不帰嶮越えの唐松岳登頂に成功し、当初の目標が達成できたので計画より6日も早かったが春山合宿の幕を閉じた。幸運にも恵まれ貧弱の装備ながらも厳しい国境稜線での活動が出来たと言える。白馬岳主稜登撃は実らなかったものの、小日向尾根からのPolar Methodによる積雪期登山の体験が後に続く若者に引き継がれることを願い山を下る。春浅く、村にはこぶしの白い花がチラホラ咲いていた。

【女子部】

◆ 【新人歓迎合宿】

○ 戸隠連山

【期 間】 昭和32年5月11日～12日

【参加者】 L河口歌子 宮下常子 中村和美 寺田結

【記 錄】

5月11日 篠ノ井駅発7：14～長野駅着7：30出発 7：40～八坂茶屋10：10～一の鳥居

11:30～昼食後 出発12:00～中社14:30～牧場着15:30キャンプ。雨模様の中、テントを張り食事の用意。

少し離れた所に小林（盛） テントを張り目付役

5月12日 牧場発6:30～奥社7:30～百聞長屋

8:40～蟻ノ塔渡 9:40～八方睨10:00～一不動

12:30昼食～牧場着14:00テント撤収、出発

15:50～中社16:50～長野16:40解散

【所 感】一不動は雪が多く足場が悪いのでザイルを

使用。小雨の中、寒くてがたがた震えながらの昼食をとった。雨に祟られ、季節外れの寂しい牧場で幕営した。一泊二日ではあったが小林さんの目付役で、少し自信が出来た女子部初山行であった。

◆【夏山合宿】

○ 針ノ木～穗高縦走

【期間】昭和32年7月19日～8月1日（14日）

【ルート】大町駅～扇沢～大沢小舎～針ノ木雪渓～針ノ木小舎〔男子部と合流〕蓮華岳～船窪～鳥帽子岳～野口五郎岳～鷲羽岳～三俣蓮華～双六～槍ヶ岳～大キレット～北穂山頂～奥穂岳～吊尾根～前穂高～岳沢～上高地～島々～松本

〔女子部は針ノ木で男子部と合流同一行動〕

【参加者】清水部長 L河口歌子 宮下常子宮本範子 饗場邦光

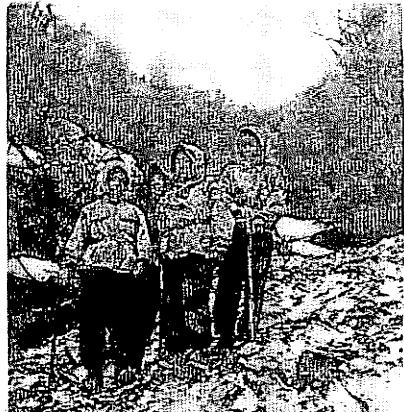
【記 錄】

7月19日 長野駅発 6:15～松本駅 8:27 大町10:35～扇沢との出合～大沢小舎付近にテント設営雨模様

7月20日雨 雨のため停滞

7月21日曇 キャンプ出発～針ノ木雪渓～針ノ木小舎付近にてキャンプ。夕方近くになってようやく晴れ間が見える。本隊到着せず。

7月22日（晴）本隊到着せず。グリセードを楽しんでいるうち転倒、小屋のアルバイト学生に助けられる。以後慎重に。



—雨の、一不動への雪渓にて—



—針ノ木小舎前にて（女子部）—

7月23日（晴）本隊到着せず。

7月24日（晴）ようよう本隊と合流。3日間、雨で停滞とのこと。清水部長下山。

以下本隊と行動を共にする。

【所感】悪天候のため、到着しない本隊を待つ間、毎日針ノ木まで迎えに出かけた。その間、清水部長から雷鳥親子の愛情深い話を聴きしたり、食糧不足を補うためアザミ採りをしたりしたことが心に残る山行であった。

◆【志賀高原スキー・合宿】

【期間】昭和32年12月26日～12月29日

【参加者】L河口歌子 宮下常子 宮木範子 中村和美 大塚寿子

【記録】

12月26日 長野発 9:18～湯田中着 9:57～一ノ沼11:10～ヒュッテ

午後 14:00～15:30研究所周辺で足慣らし

12月27日 9:00～11:30信大ゲレンデ周辺で基礎訓練 午後 13:30～16:00丸池ゲレンデにて基礎練習

12月28日 午前8:30～午後15:00発哺スキー場で練習

12月29日 8:30～11:30本戸池、熊ノ湯スキー場まで遠征。午後 ヒュッテ発13:30～一の沼14:40～湯田中15:40～長野解散

【所感】女子だけで初めてのスキー合宿で、技術というよりも専ら心臓で滑っていた。

（吉沢健・小林盛男・河口歌子記）

充実期をむかえて

－1957年（昭和32年）度夏山北アルプス全山縦走を中心に－

○ 前年、昭和31年度の夏山合宿で、富山県宇奈月から立山を経、傘岳まで足をのばし穂高岳まで縦走した体験や、秋山偵察山行のあと、槍ヶ岳北鎌尾根を末端から縦走・踏破した経験などから、無積雪期の北アルプスの尾根筋は歩き通せるという自信が部員の間に広まっていた。加えて、昭和32年度の新人部員が10名を越える大勢の加入だったので、これら新人部員の体力養成・山行訓化を兼ね、いまだ歩いてなかった白馬岳以南の後立山連峰を加えた北アルプス全山夏山縦走を計画できるまでになった。信州大学長野山岳部も充実期を迎えたといえよう。

○ 縦走合宿は7月15日から8月4日までの20日間の計画で、白馬大雪渓から入り穂高岳

まで北アルプスを全山縦走した。途中、怪我や都合で下山する者もあったが、本隊は予定通り計画を終了することができた。

総勢21名という一行で、行き会うパーティーにぶつかると、広い尾根筋では対向も可能であるが、逃げ道のない切戸などでは通過するまで待ってもらったり、待っていなければならず、ひどい時には40～50分を要し、相手パーティーにぼやかれたり、こちらがぼやいたりしたものだった。

その合宿の食料計画を見ると夕食の「御飯、にもの」とある日の量は「米2.65升、大根3、ジャガイモ10、玉ねぎ7」とあって量の多さを伺い知ることができる。3升近い米を炊く容器は飯盒ではとても間に合わないので、大きな鍋で、ふたを固くしめて炊いた。

3000M近い尾根筋で気圧の影響もあったであろうが、けっこう美味しいご飯が炊けたものだった。

○ こうした大きなパーティーでの活動の経験が2年後の装備の充実と相まってサポート隊を駆使した、画期的な積雪期北アルプス全山縦走へと発展していったのである。昭和32年度の部員数は実に32名の多きを数えている。

○ この年、部員数も多くなった部のあり方を含め、それまで何となく共通理解されてきていた部のきまりを成文化し、はっきりさせる必要に迫られ、「部規約」が検討された。

「総則」から「機構」「各
係とその任務、任期」
「入・退・休部」「部費」
「部会」「合宿」等にわたり、一年間の活動記録を
部誌として残したり、女子部も三つの合宿を独立
して行うことなどが規程
されている。部誌「S N
A C」が発刊されたのも
この規約による。

こうした事も充実期の一つの歩みといえよう。



蓮華岳頂上で -32年夏山縦走より-

(吉沢 健)

信州大学長野山岳部規約

前文 本規約は信州大学長野山岳部の部運営のためにこれを設ける。

第1章 総則

第1条 本山岳部は信州大学長野山岳部（S. N. A. C）と称する。

第2条 本部員は信州大学教育学部長野本校並びに信州大学工学部に在籍する学生に限る。

第3条 本部員が日常生活において、部員としての自覚のもとに責任ある態度をとり、部員相互の親睦をはかると共に、また人間形成をめざし、また登山技術の研鑽に努めるよう努力しなければならない。

第2章 機構

第4条 本部は部長、顧問を置き、リーダー、サブリーダー、マネージャー、装備、食糧の各係より成る。

第1節 各係の任務

第5条 リーダーは部の統率に当たり、最終的責任を負うものとする。

第6条 サブリーダーはリーダーの補佐及び部の会計に当たり、合宿の記録を整理するものとする。

第7条 マネージャーは部の涉外一般に当たるものとする。

第8条 装備係は部の装備の管理と合宿の装備計画立案・検討に当たるものとする。

第9条 食糧係は部の食糧の管理と合宿の食糧計画案・検討に当たるものとする。

第2節 各係の任期

第10条 各係の任期は冬山合宿後の部会から1年間とする。

第11条 各係の更迭は部会で行い、部の承認を得なければならない。

第3節 入・退・休部

第12条 入部希望者はリーダーに申し出、部会の承認を得て入部することができる。その折、入部費百円を納めなければならない。

第13条 休・退部希望者は、理由を添えてリーダーに申し出、部会の承認を得て、休・退部は認められない。

第14条 休部者は部費を収めなければならない。部会には出席しなくてもよい。

第15条 部活動に支障を来たしたり、部の気風を乱すものはリーダー・サブリーダー・マネージャーの話し合いのもとにリーダーの名をもって部を除名することができる。

第4節 部会

第16条 部会は原則として週1回リーダーの招集のもとにおこなわれる。リーダーはその旨を1日前までに掲示しなければならない。

第17条 部会においては部費納入、合宿計画の検討、合宿の反省、入・退・休部者の承認、各係

更迭、その他の山行などの話し合いをするものとする。

第18条 部会には特別の事情のない限り出席せねばならない。出席できないものはその旨を前もってリーダーかサブリーダーに通知し、承認を得ておかなければならぬ。

第5節 部費

第19条 部費は1ヶ月30円とする。その納入は定められた月の内に会計係に納めなければならない。

第3章 合宿

第20条 合宿は夏山合宿・冬山合宿・春山合宿の三合宿とする。

その他、新人歓迎・秋山偵察・荷揚げ・志賀送別スキーなどの山行がある。

第21条 部員は三合宿の内二合宿以上は参加しなければならない。

ただし、やむを得ぬ事情のある者はリーダーの許可を得てそのかぎりでない。

第22条 各合宿・山行の折には各係が変更する場合がある。その場合は部会の承認を得ておかなければならない。

第4章 女子部

第23条 女子部は三合宿のみ男子部員と行動を別にすることにする。

合宿の計画はリーダーに相談し承認を得なければならない。

三合宿以外の山行はすべて男子部員と一緒にし、リーダーの指示に従わなければならない。

第5章 装備

第24条 部の装備はやむを得ぬ場合を除いては他団体に貸すことはしない。やむを得ぬ場合は係を経てリーダーに申し出、許可を得なければならない。

第25条 部の装備は無断で持ち出すことを禁止する。使用する場合は係の承認を得なければならない。

第6章 トレーニング

第26条 トレーニングは特別の支障のない限り毎日行うことを原則とする。

第27条 特別の事情のある者は前もって責任者に申し出承認を得ておかなければならぬ。

第28条 週1回、校外トレーニングとして物見岩ザイルトレーニングを行うものとする。

第7章 部誌

第29条 リーダーはその任期の終わりに一年の山行の記録をまとめ部誌を発行しなければならぬ。

第8章 OBとの関係

第30条 部の卒・修業生はOB会に入会するものとする。

第31条 OBは部の合宿その他の山行に参加することができる。

参加する場合は前もってその旨をリーダーに通知しなければならぬ。参加の際はリーダーの指示に従うものとする。

第32条 リーダーはOBにたいして年次計画・合宿その他の山行の通知をしなければならぬ。

第33条 O B の援助を得て購入した装備は O B との共有装備とし、その管理はすべて部が行うものとする。

第9章 補則

第34条 女子部は昭和33年2月1日より発足するものとする。

第35条 本規約は昭和33年2月1日より効力を発する。

1958年度（昭和33年度）

○新人合宿（北アルプス常念岳～燕岳縦走）

・期 日 5月2日～6日

・L宮尾裕 池田孝雄 祐津直行 柳沢勝輔 吉沢信平 町田金四郎 戸沢義久

片岡格 小野義郎 蒔田修 茅野靖夫 寺島 若山

・費 用 合宿費250円 旅費（長野～信濃木崎、学割利用・バス代）300円 計550円

・団体装備 テント、シート、ナタ、ノコギリ、ケイネン、ローソク等

・個人装備 地下たび、布風呂敷、雨具（ナイロン、風呂敷等）、マッチ

・食 糧 食事A 1 飯（米1、5合の割合）味噌汁（味噌、ジャガイモ、人参、キャベツ、竹輪）干魚

A 2 飯（米はA 1に同じ）味噌汁（同上に加えて油揚げ）納豆、つくだに

B 1 （昼食）飯、さんま開、つけもの

B 2 （昼食）飯、ミリン干、漬物

C 飯、カレーライス（肉類、カレー粉、メリケン粉、塩、ジャガイモ、人参、玉ねぎ、バター）つくだに。

・行動記録

5月2日 晴 松本～柏矢町（バス）8：21～烏川発 9：35～一の沢常念沢出会い
15：00幕営

5月3日 晴 キャンプ地発 6：50～前常念沢の出会い 7：50～常念小屋11：00～12：40
先発隊の片岡、小野、蒔田が合流。常念小屋発13：00～常念岳頂上13：45
～常念小屋着14：50。途中百瀬斐敏監督に会う。16：00まで雪上訓練。常
念小屋付近でキャンプ。

5月4日 曇り 天候不順につき停滞。午後1：00～3：00雪上訓練。池田、茅野、
百瀬監督下山。

5月5日 晴 出発 6：50～東天井岳 8：30～大天井岳 9：15～燕山荘12：50～燕岳
13：50～坂下17：50キャンプ

5月6日 晴 坂下発6:50～宮城着8:30

○春山山行合宿（北アルプス常念岳より槍ヶ岳往復）

・期 日 4月26日～5月3日

・参加者 L小林盛男 大森晋 蒔田修 片岡格 小野義郎 中沢俊夫

・行動記録

4月26日 松本市信州大学文理学部寮に集合

〃27日 松本発5:43～柏矢町6:11～一の沢、常念沢出合キャンプ

〃28日 キャンプ地発～常念岳～大天井岳キャンプ

〃29日 大天井岳～西岳小屋～大天井岳キャンプ

〃30日 大天井岳～槍ヶ岳（小林、大森、中沢下山）～大天井岳キャンプ

5月1日 大天井岳～蝶ヶ岳～大天井岳キャンプ

〃2日 大天井岳～常念小屋キャンプ

〃3日 常念小屋～一の俣～常念小屋・新人合宿に合流

○ファリア会登山（北穂高岳）

・期 日 7月15日～17日

・参加者 L小林盛男 中田邦雄 中沢俊夫 町田金四郎 ファリア会員10名

・行動記録

7月15日 上高地13:00～明神14:00キャンプ

〃16日 明神6:00～横尾8:30～涸沢12:00～北穂高岳15:30

〃17日 北穂高岳5:00～穂高小屋8:00～涸沢9:00～横尾10:30～上高地

○夏山合宿（針ノ木～剣岳～白馬岳縦走）

・期 日 7月20日～8月8日

・参加者 L大森晋 祐津直行 中沢俊夫 町田金四郎 戸沢義久 大西通夫

若狭一男

後発隊（真砂沢にて合流） L小林盛男 丸山孝 大井篤

・行動記録

7月20日 晴後夕立 長野発6:15～大町9:37～大沢小屋15:30キャンプ

〃21日 晴 大沢小屋7:00～針ノ木峠12:00 雪上訓練 キャンプ

〃22日 晴 針ノ木峠7:00～平小屋14:30～15:30 キャンプ

〃23日 曇後雨 平小屋7:00～刈安峠9:30～五色原13:00 キャンプ

〃24日 雨 五色原8:00～ザラ峠8:40～一ノ越13:00 キャンプ

〃25日 強風雨 停滞

〃 26日 強風雨 停滞

〃 27日 小雨後曇 一ノ越 7:00～別山10:00～劍沢11:30～真砂子沢13:30 キャンプ

〃 28日～8月4日 真砂沢定着合宿
八ツ峰縦走（上半分、下半分）、源次郎尾根縦走、八ツ峰A、6フェイス、
源次郎尾根二峰平蔵谷側A、2フェイス、クレオパトラ・ニードル
(7月31日 後発隊小林、丸山、大井合流。8月1日 町田長次郎谷上部
にて負傷、小林が付き添って富山に下山)

8月5日 晴 真砂子沢7:00～二股8:00～池ノ平10:00～仙人池11:00～阿曾原
15:00～猿飛17:00キャンプ

〃 6日 晴 猿飛7:00～祖母谷温泉7:40～不帰小屋跡15:00キャンプ

〃 7日 晴 不帰小屋跡7:00～清水岳10:00～白馬岳12:30キャンプ

〃 8日 晴 白馬岳7:00～白馬尻9:30～猿倉10:30

・感想 雨にたたられた合宿であった。針ノ木を越えて黒部川を渡ってから真砂子沢までは連日雨とのつき合いとなった。長い夏山の合宿に、肉類をなんとか持つて行けないものかと考えた末、鯨肉を味噌漬けにしてみることにした。安価な鯨肉と味噌を都合よく使う試みだった。ところが、雨に濡れて身体が疲労していたせいか、雨の中の行動で肉がいたんだためか、全員が激しい下痢に見舞われてしまいさんざんな合宿となってしまった。

○秋山涸沢定着合宿

- ・期 日 9月28日～10月8日
- ・参加者 先発隊 L 大森晋 蒔田修 片岡格 大西通夫 小林盛男
後発隊 L 宮尾裕 越田寛 中田邦夫 小野義郎 戸沢義久
- ・行動記録
9月28日 晴 松本8:30～上高地11:30～明神12:10～徳沢13:20～横尾14:35～
涸沢16:50キャンプ
- 〃 29日 晴 A隊（大森、片岡、蒔田）北穂高東稜より滝谷第2尾根 B C 7:00
～第2尾根取り付き10:00～北穂高岳11:30～B C 17:30
B隊（小林、大西）第3尾根
- 〃 30日 曇 A隊（大森、蒔田、大西）第3尾根
B隊（小林、片岡）第4尾根 B C 4:00～北穂高岳5:42～スノ-

コル7：17～ツルム9：20～d カンテ10：00～縦走路10：50～B C

10月1日 曇 A隊（大森、蒔田、片岡）B C 5：55～5峰 6峰のコル7：05～5峰
7：30～4峰 8：00～3峰 8：45～前穂高岳 9：20～奥穂高岳 11：00～B
C 12：15

〃 2日 雨 停滞 後発隊合流

〃 3日 曇 大西連絡のため上高地往復

A隊（宮尾、片岡）第4尾根完登 B隊（越田、大森）第3尾根完登

〃 4日 晴 宮尾、中田、戸沢、大西 北尾根～ジャンダルム～B C

〃 5日 晴 越田、中田 第2尾根完登

〃 6日 雨 停滞

〃 7日 晴 潟沢～上高地

〃 8日 晴 上高地にて解散

・感想 秋山の合宿は岩場を中心としたもので、手近な穂高山群がいつものように選定されてはいたが、冬の穂高を徹底研究するための足がかりになるものと考えていた。しかし、部内の状況は、ピッケル、シュラフザック、登山靴、ヤッケなどが十分に間に合わず、借用で賄っていた。それでも火器のラジュースは、アラジン2個、スペア1個と記されている。いずれも米軍の放出品である。この頃マジックという油性ペンが出てきてついぶん重宝がられ、装備の一つになっている。ガソリンは5升五号と記されている。リットルよりも分かりやすかった。

○冬山合宿（明神岳東稜より前穂高岳）

・期 日 12月23日～1月2日

・参加者 L宮尾裕、S L大森晋、片岡格、中沢俊夫、丸山孝、祢津直行、蒔田脩、町田金四郎、大西通夫、大井篤

・行動記録

12月23日 長野 6：15～松本 8：45～
沢渡11：00～清水トンネル
手前15：00

〃 24日 清水トンネル 7：30～上高地16：00

〃 25日 上高地 7：30～明神 8：30～
～上宮川沢取付点 9：30既



33年 冬 山

設置。上宮川沢まで偵察

- 12月26日 B C～ひょうたん池にC 1を建設
- 12月27日 風雪にて停滞
- 12月28日 主峰直下まで偵察
- 12月29日 大森、片岡、祢津、蒔田の4名がアタックに出るも、ラッセル深く、明神岳主峰より引き返す。町田C 1に入り、丸山B Cにくだる。
- 12月30日 大森、片岡、祢津、蒔田の4名がアタックに出るも、天候悪く引き返す。
中沢C 1に入る。
- 12月31日 C 1より明神岳主峰を越えて、前穂高岳のアタックに成功。
- 1月1日 C 1 B Cを撤収。上高地を経て清水トンネルを抜けてキャンプ。
- 1月2日 清水トンネル～沢渡～松本～長野（解散）

この冬山合宿は雪が多く気温も異常だったので、警察から登山者に下山命令が出された。我が山岳部でも、百瀬監督はじめOBの田島、吉沢さんが連絡に入山された。しかし、登山隊には無線機もなく、下山命令の情報は下山してから知ることになった。この冬は雪崩に因る遭難事故が相次ぎ、W大、K大など多くの大学山岳部で幾人もの死者を出した。前年から数年前のH大やN大の遭難と合わせて、この年までの有力大学山岳部は大きな打撃を被った。

○春山合宿（北アルプス明神岳東稜より奥穂高岳）

〈はじめに〉

我々は、後立山連峰での数年間にわたる積雪期登山を通して、積雪期における基礎的な登山技術の修得と後立山地域の理解を深めてきた。これらの成果の上に立って、より発展的に我々の登山活動を推し進めるべく、対象地域を穂高連峰に移し、登山技術の修得を図るとともに、穂高連峰の理解に取り組むことにした。それはまた、我々の登山活動の一つの試みであった。

穂高岳に取り組むにあたり、①明神岳東稜から奥穂高岳、②北尾根から奥穂高岳、③西穂高岳から奥穂高岳、④横尾尾根から奥穂高岳を当面の課題とし、本年はその第一年次として明神岳東稜から奥穂高岳をとりあげた。

冬の穂高山群は我々の永年の夢であった。今まで憧れつつも畏っていた穂高に、培ってきた力を試すときと気持ちを新たにし、この課題に、より大きな成果をもたらすべく、明神岳東稜より奥穂高岳へ極地法登山を展開し、部員の技術を高めると共に、貴重な資料を得ることができた。

- ・目的 積雪期における穂高岳の理解を深め、基礎的な登山技術の習得を図る。
- ・方法 上宮川谷末端にB Cを設営し、明神岳主峰を越えてA Cを設営して、極地法により奥穂高岳をアタックする。
- ・期 日 3月13日～4月3日
- ・参加者
先発隊（B C設営と荷上げ）L中沢俊夫、町田金四郎、宮島卓浪、大西道夫、
若狭一男
本 隊 L大森晋 S L兼記録係片岡格 S L兼会計係蒔田修 装備係丸山孝・宮島
卓浪 食糧係祢津直行・戸沢義久 医務・気象係中田邦夫
- ・行動記録
 - 3月16日 晴 長野発 6:15～松本～島々着 9:15、発 9:50～沢渡着 11:24、発 13:00～坂巻温泉 15:10～釜トンネル 17:15、就寝 19:45、先発の荷上げ隊は下山。
 - 3月17日 小雪 積雪上高地 5～6 cm、気温 4°C (4:30)、B C - 4°C (16:00)
A隊 大森、蒔田、中田、宮島、戸沢 釜トンネル～上高地～宮川谷口
B C～上高地～釜トンネル 14:26
B隊 片岡、丸山、祢津、釜トンネル～沢渡～上宮川谷 B C 17:50
 - 3月18日 曇り後晴 気温 (4:30) 4°C、(16:00) パーティー前日と同じ
A隊 釜トンネル 5:40～大正池～帝国ホテル～上宮川谷 B C 着 10:40
B隊 B C 発 5:55～ひょうたん池着 9:10、発 12:30～B C 着 13:50
 - 3月19日 快晴 気温 (3:00) -11°C (17:00) -11°C
A隊 大森、片岡、祢津、中沢 C 1 へ荷上げ。B C 発 6:40～C 1 9:05～B C 着 13:37
B隊 蒔田、丸山、中田 一枚岩付近のフィックスと明神主峰までの偵察
B C 発 5:45～C 1 着 7:47、発 8:30～コル 10:27～明神主峰着
14:20～C 1 着 16:35。偵察の結果、明神岳主峰直下のコルに C 2 を設営することに決める。
 - 3月20日 晴後雪 気温 (4:00) -9°C
A隊 大森、戸沢、宮島 B C 発 6:45～C 1 着 8:15、発 14:10～B C 着 14:45
B隊 片岡 祢津 B C 発 6:25～C 1 着 8:20、発 10:05～C 2 着 13:00

C隊 蒔田、丸山、中田C 1発7:05～コル着8:58、C 2建設10:00～
11:00、C 2発12:20～C 1着13:03

3月21日 曇後晴 気温(6:00) -9°C

A隊 蒔田、丸山、中田C 1発8:40～10時頃より雪崩が出始めたため、
一枚岩下より引き返す。

C隊 片岡、祢津C 2発8:06～P 1着10:50～前穂高明神岳のコル12:
00～C 2 15:00、明神岳と前穂高のコルまで出たが、雪質悪く引き
返す。

C隊 大森、宮島、戸沢B C発6:50～C 1着9:03、発9:30～B C着
10:15

3月22日 雪後雨 気温(6:00) -1°C 停滞 7日目にして訪れた休息日

3月23日 吹雪激しい 停滞

3月24日 曇後雪 気温(6:00) -10°C

A隊 蒔田、丸山、中田C 1よりC 2へ荷上げ

B隊 片岡、祢津、明神主峰直下にザイルフィックス(30m)

C隊 大森、戸沢、宮島B CよりC 1入り一昨日の雨でデブリが多い。

3月25日 快晴 気温(7:10) -3、5°C

A隊 大森、蒔田、丸山C 1より前穂頂上 C 1発5:30～C 2着7:50、
発8:30ザイルフィックス30m 1本、40m 1本。明神岳主峰着10:
20～前穂高岳頂上着12:50～主峰14:00～C 2着15:30

B隊 片岡、祢津C 2より奥穂高岳アタック C 2発5:45～P 1 6:25
～コル7:00～前穂高8:30～奥穂高岳9:50、発11:10～奥穂高
岳12:30～P 1 14:00～C 2着15:30

C隊 中田 戸沢 宮島C 1よりB C往復C 1発5:40～B C着6:45、
発7:20～C 1着9:10。

深く青い空、白い稜線、果てしなく続く雲海、遠く浮かぶ富士、南アルプスの連
山。昨日とは打って変わりうそのような天気だ。片岡、祢津の2名が奥穂高の頂上
にたつことができた。

3月26日 風雪強し 気温(5:30) -10°C

A隊 蒔田、丸山第2次のアタックに出たが風雪激しく引き返す。明日、ねらう事にする。C2発5:10～主峰5:30～C2 6:35

B隊 大森、祢津C1へ下る。

C隊 中田、戸沢、宮島C1にて停滯

3月27日 晴強風、午後ガス 気温(2:30) -14°C

A隊 第2次アタックに成功C2発6:20～前穂高頂上8:42～奥穂高岳頂上着11:27、発12:30～前穂高着14:27～峰14:40～C2着16:00風雪のためラッセルがあった。

B隊 中田、戸沢、宮島C1～C2～P1～C2

祢津C1からBCへ下り、百瀬監督を迎える。その後、監督と共にC1へ上がる。

3月28日 晴 気温(9:00) 1.5°C

片岡、中田、戸沢、宮島C2よりC1へ下る。

片岡、祢津、中田で再びC2に上る。

3月29日 晴後ガス強風

A隊 片岡、丸山明神岳最南峰の偵察C2発6:20～明神P2 7:10～P5 7:52～P2 9:20～P1着11:15、発11:40～C2着12:45

B隊 蒔田、祢津、中田前穂から北尾根の偵察C2発6:20～前穂8:20ガスがあって見通しがきかず、1峰2峰のコルまで下ったが引き返した。前穂発10:20～C2着12:40明神直下のザイルフィックスをはずす。

3月30日 雨時々雪 強風で停滯、水がテントの底にたまる。ローソクや火器がよく燃えない。

〈AC設置の翌日から天候崩れ、ACに片岡氏と3日間閉じ込められた4日目の前穂、奥穂アタック日の記録〉

〈アタックメモ〉 一 祢津直行の記録より 一

午前3:30起床、エッセン用意。ホエブスの音に緊張を覚える。ナイロンザイル、三ツ道具、食料、ミソパン、ピーナッツ、サッルタナ、みかん、アメ等々 ザックにつめる。赤旗も。

AC発5:45昨日設けたフィックスザイルを使って登る。主峰の壁はザイルなしで登る。スッキリと晴れ渡り鮮やかな雲海が広がっている。前穂に続くピークが徐々

に明るくモルゲンロートが美しい。アイスバーンを叩いて一息ついた折、ふと見たピッケルのシャフトに割れキズを発見、肝を冷やす。昨日のフィックスザイルをかける時のものか?心して扱うことにする。前穂の登りは雪と岩のミックス。クラストした雪にアイゼンがよく噛む。頂上にて、ピーナツを食う。天気よし。雲海が静かに動く。片岡がヤッケのポケットより秘かに持参したチーズを出す。2人で「美味しい、美味しい」を連発しながら食べる。馬力が出る。吊り尾根にて、ザックの大きな縦走パーティに会う。コルより少しピッチを上げて登る。奥穂への登りは雪がついていて夏山より歩きやすい。アイゼンがよく効いて快調にピッチがあがる。体調もいい、気分も最高。黒い岩、白い雪、青い空、弾む息。頂上着9:50~11:00感激、握手。昼食をとり、記念撮影。白い地表の上に、黒に近い青空が奥深い、星が見えるか探したが……。みかんの味。皮の色の鮮やかさが、白く輝く世界の中で鮮やかだ。頂上近辺には沢山キジが射ってあった、すべてが雪の白さと気温の低さの中で清潔に感じる。北穂の後にマッターホルン(槍)が突き出ている。ジャンが笑っている。頂上の岩には“エビのシッポ”的な大きなやつが着いている、ついひとつかじってみる。頂上発11:00帰りの吊り尾根は時間をかけて慎重に降りる。時折セッピ越しに涸沢を覗く。岳沢側に雪崩ヒンパンに落ち始めた。前穂着丸山、蒔田の2人がC1より登って来た。アタック成功を祝う。タバコに火をつける。美味しい。4人で記念撮影。頂上付近はアイゼンが効いて快調。ラクダのコル(A C)に帰着。疲れが急に出て1日の行動の大変さを自覚する。水が美味しい。今日よりACは片岡の他、丸山、蒔田、大森の3氏が加わり賑やか。うれしい。



ひょうたん池BCにて



奥穂頂上の祢津

3月31日 ガス濃し、時々晴間、撤収ガス濃く風はない。やがて、陽も少しさしてき
た。一枚岩上方に7本のフィックスをして、4時間でC1に下る。この日、
一気に上高地へ。

片岡、丸山C2発7:25フィックスをする。

本隊C2発8:00～C1着12:00～B C着14:35発15:45～上高地小梨平着
17:30

4月1日 曇

大森、蒔田、丸山、戸沢、宮島上高地発5:45～西穂沢～西穂頂上着10:
52発11:29～岳沢出合12:50～上高地着14:15

片岡、祢津、中田、田代池方面へ散歩

4月2日 快晴

片岡、祢津、中田、上高地発5:20～天狗のコル8:30発8:55～西穂頂
上10:50発11:40～上高地着13:15

4月3日 晴 気温 -5℃ 下山 上高地発6:45～田代池7:22～釜トンネル8:
10～中の湯8:55～清水トンネル9:45～山吹トンネル10:35～沢渡着12:
14発12:50～長野着16:35－合宿終了－

わが隊の春山登山の成功は、雪が多かったところに因るところが大きかった。なに
しろアイゼンは全部で5人分しかなく、岩稜での行動は人数に制限があった。その点、
積雪があった分、輪かんじきでの行動ができ、雪を利用した登攀でもあった。しかし、
テントの中に敷いたマットは炭俵であり、暖冬となってからは水びたしになって大変
であった。

(柳沢勝輔 記)

女子部の記録

○新人歓迎山行（北アプラス常念岳）

春、雪の常念岳に女子だけで登るとい
う入部以来の夢を実現させた合宿である。
部員相互の親睦、雪渓技術の習得、天幕
生活が目的。

・参加者 L宮下常子 S L宮本範子
中村和美 大塚寿子 津金周子

（サポートー、別行動）小林盛男



常念岳にて

蒔田修

・合宿費 一人240円

・行動記録

4月27日（曇後雨）長野～壊れた小屋跡

長野発～柏矢町から徒歩で島川、開墾地から入る。雨になり、壊れた小屋跡に幕営。

4月28日（快晴）テント～常念小屋

小林と蒔田到着。雪渓に入る。2ピッチで一の沢と二の沢の出会いに出る。硬い雪の急な斜面の上りで津金スリップ。宮下ストップに失敗して二人で転落。立ち木で止まる。林の中の急斜面が続く。小林・蒔田が津金の荷を持ってくれる。常念小屋到着 3：45

4月29日（薄曇り）（天皇誕生日）常念岳頂上往復、テント撤収～常念沢

出発 7：15、8：05夢に見た常念岳頂上に立つ。北穂真っ直ぐ目の前に勇姿をみせていた。穂高連峰の山々、安曇平の眺望を心ゆくまで眺める。テント場付近でグリセード練習。雪の斜面はザイルを固定して下る。常念沢のテント場着 5：50

4月30日（快晴）下山 常念沢～長野

荷も軽くなり、道もなだらかで皆快調に下山した。松本で百瀬さんに報告。初めての女子部員だけの春の積雪期の登山をし、雪の斜面の登り降り技術の不足、トレーニング不足を痛感。新人の転落をストップできなかったことは最大の反省事項。小林・蒔田のサポートもあったが、女子だけで主体的に計画し、春の常念岳登頂は、女子部の次の山行の貴重なステップになった。

○夏山合宿（富山～剣岳～五色が原～平の渡し～針の木峠～扇沢）

女子5名で10日間の北アルプス横断を計画した。男子部員の合宿が剣沢だったこと、剣岳～五色が原、針の木峠は踏破済みがこのルートを選んだ理由。女子部員のみで縦走・体力の養成・野営の確実かつ敏速な行動が目的。

・参加者 L宮下常子 S L宮本範子 中村和美 大塚寿子 津金周子

合宿費1,000 交通費1,000円

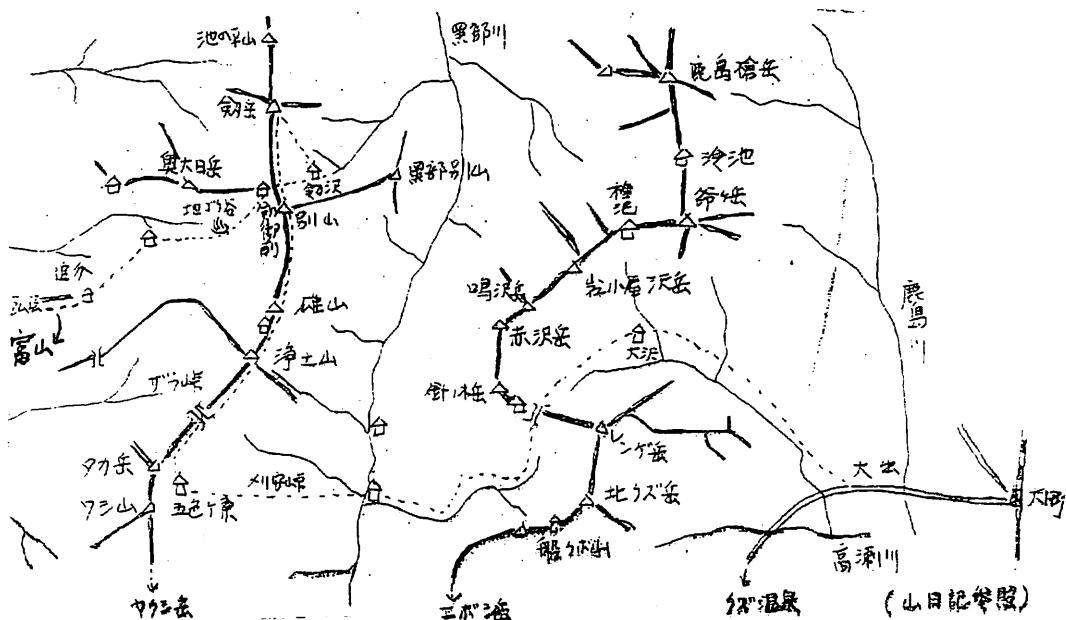
・行動記録

7月26日（雨）長野～富山～追分

長野発～富山～千寿が原～美女平まで、乗り継いで行き、追分で幕営。一日中雨。夕刻、雨やみガスが上がる。

7月27日（雨・ガス）追分～地獄谷

6:00雨止み行動開始。下界は明るいが山は霧。出発9:15、天狗原のあたりから津金・大塚バテ気味。遠くで雷の音。体の不慣れと激しい雨のため、



め、行動半日で地獄谷に幕営。

7月28日（曇り後晴）地獄谷～剣沢

天候の様子を見て9:00出発。雷鳥沢～室堂乗越を経て、剣御前小屋で昼食。剣沢着2:00。大塚と津金は疲労大きく称名川の渡渉は、宮下と宮本が二回荷を運ぶ。剣沢では、女子五人で大きなザックを背負ってきたので注目の的だった。グリセード練習。皆かなり上達した。別山の尾根まで散歩。空は晴れて剣岳、ハッ峰の勇姿が美しい。夕飯はてんぷら。

7月29日（晴、ときどきガス）剣岳往復

大塚発熱、中村・宮本・津金も体調を崩した。祢津が本隊も相当風邪ひき

が出たと連絡に来る。祢津同行し、全員で剣岳登頂。一服剣までは坦々とした尾根道、前剣から剣岳頂上までは岩場が多く、ホールド・スタンスが確実で楽しいルートだ。テント着後、大塚の熱が上がる。全員剣岳登頂は嬉しい。

7月30日（晴れ、午後、薄い雲が時々出る）大塚下山、真砂沢往復

大塚は発熱と疲労のため下山。中村・宮本が追分まで送る。宮下・津金は真砂沢で雪渓歩行訓練、グリセード練習。今度は宮下が風邪気味。

7月31日（朝曇り、後雨、ガス）剣沢～一の越

7：20中村・宮本が帰る。小林L・丸山・大井が到着し予定変更など打ち合わせ、出発。剣御前小屋～別山を卷いて、真砂岳は頂上を通る落差のない道だ。大汝の上りは急坂だ。ルートはほとんど富山側を巻き、風が強い。ときどきガスが切れて一瞬青空が現れる。雄山で羊羹を食べる。一の越の小屋下に幕営。夜は行程半分終了のパーティー。

8月1日（曇後雨）一の越～五色が原～平

浄土山で大雨に遭い、富山大学研究所に一時避難。濃いガスの中を歩く。竜王岳の下りで、黒い合羽の男性と登山道が違うと議論になる。トップの中村は戻るように曲がっている道を選んで進む。雨はザラ峰で上がり、五色が原の赤い岩肌に歓声をあげる。五色が原で昼食。体が縦走に慣れて、刈安峠を経て平まで真っ直ぐ下る。

8月2日（晴、時にわか雨）平～針の木峠

黒部川を渡る吊り橋は大きく重い荷のため、大きく揺れる。下は逆巻く急流で、眩暈がして難渢した。宮本は所要時間を記録。南沢の出会いまでの川に平行した道は所々岩場があり、バランスの訓練によい。神戸医科大学のパーティーとぬきつぬかれつして進む。針の木峠の登りでは疲れがひどかった。5：45針の木小屋着。小屋の主人、百瀬美恵子さんに一年ぶりの挨拶。合宿終了のパーティーを盛大行う。

8月3日（晴）針の木峠～扇沢～長野・自宅へ

針の木雪渓は慎重に下る。扇沢から、大町まで関西電力の工事用のトラッ

クに便乗する。トラックの高い足場にもすいすいと乗れたのは、縦走の成果。予備日を残して、一日早い帰宅だった。

女子だけで、予定通りのコースで九日間の夏山縦走ができたことは成果。縦走・キャンピングなどの行動が敏速にできた。初日から雨に遭い、体調を崩したもののが多かった。初日の行程は少なめにすべきだった。またも、体力不足・トレーニング不足を痛感した。五色が原の下り、平の吊り橋、川の渡渉、針の木越えの岩場など、体力訓練・バランス訓練に適したルートだった。皆の気心がわかり合え、北上夜曲、錆びたナイフ、針の木遭難の歌を歌い、山行への夢、人生の幸福などについて話し、死んだように眠った日々であった。

○秋山山行（涸沢・穂高連峰一帯）

冬・春山に備え、岩場の初步的訓練、体力養成を目的とした涸沢定着合宿。

- ・参加者 L宮下常子 S L中村和美 大塚寿子
- ・行動記録

9月27日 (晴) 長野～松本

長野発17:30 (松本の百瀬氏宅に宿泊)

9月28日 (快晴) 松本～上高地～涸沢

松本～上高地～梓川の左岸の旧道を横尾まで。涸沢紅葉、穂高連峰薄化粧。

9月29日 (晴、薄曇) 東稜～北穂～涸沢北穂東稜は、雪が着いているが、ホールドは確実。北穂着10:50昼食。滝谷第二尾根のP1まで偵察。

南峰・涸沢岳・ザイテン経由で帰る。涸沢は渴水。夕飯は卵丼。空が澄み、真っ赤な紅葉、常念岳から月が上り、涸沢の秋は美しい。

9月30日 (晴れ後曇り) ザイテン～奥穂～ジャンダルム～吊尾根～前穂高～涸沢
ザイテンから奥穂高へ。ナイフリッヂは、スタンス、ホールドも確実だが、高度感あり怖い。断念して吊尾根・前穂経由で下山。岩場訓練の不足を痛感。天気は崩れそうだ。

10月1日 (曇り、ガス濃い) 南稜～北穂～滝谷第二尾根往復

トップの大塚のピッチは快調、南稜を2ピッチ半で登る。滝谷はガスが濃く強風。一峰の下で引き返す。合宿中の男子の応援を得て大西・中村・小林パーティで再挑戦するが結局断念。南稜の下りも難渋。



北穂高岳にて

10月2日 (雨) 停滞

雨のため男子部員も来て、テントのなかで一日中歌や話。夕方、男子テントは大水のため撤収して上に移動する。川は音高く真っ白い水しぶきを上げている。雨は止んだが、時々雲がテントを打つ。女子の合宿で初めての沈黙、明日は下山。夜、反省会。

10月3日 (晴) 下山 潟沢～上高地～長野

女子部員だけで、滝沢定着合宿し穂高の岩場への挑戦はまだ無理、岩場登攀技術の不足を痛感した。東稜や北穂～奥穂～前穂、滝谷の入り口を歩き、岩場に慣れたことは成果。偉大な穂高連峰のど真ん中滝沢の6日間はたっぷり山も眺め、秋の滝沢の美しさには感動した。女子3人で、装備一式と1週間分の食糧を背負い上げ、いい経験だった。

○荷揚げおよび冬山・春山偵察登山 (八方尾根かんば)

- 11月22日・23日八方尾根黒菱小屋～唐松岳の偵察と、冬山・春山の荷揚げをした。
- 参加者 宮下 宮本 大塚 中村 栗林 小林 遠藤 小野 (略)

○冬山合宿 (八方尾根～唐松岳)

女子だけの積雪期登降技術、雪中露営の訓練を清水部長、小林さんの指導で行った。

- 参加者 L宮下常子 S L宮本範子
中村和美 大塚寿子 津金
周子 栗林紀子 清水悟郎
部長 小林盛男 (指導者)
- 費用 合宿費800円 交通費500円
- 行動記録

昭和34年1月5日 長野～細野～黒菱
長野発。ケーブルでうさぎ平まで。東葉
大ヒュッテ横に、小林の指導で炭俵、ベ
ニヤ板を敷きウインパーテントを張る。

1月6日 かんば往復

宮本・中村・大塚・部長がかんばヘルートの偵察。残りは、荷揚げと雪洞掘り。

1月7日 かんばの上まで往復

全員がかんばの上まで。小林・宮下・中村・宮本で丸山の二峰まで偵察。
かんばの上は積雪も多くラッセルに苦労する。先発のラッセル隊を出し、
BCを早く出発すれば唐松岳アタックは可能だろう。スキー練習。



八方尾根にて

1月8日 (曇り、時々晴、吹雪) かんば往復

朝食お雑煮。ラッセル隊（宮下・津金・栗林）出発6：15アタック隊（小林・宮本）が追い着く。わっぱをはいて登る。気温は高い。不帰のキレットから五竜岳まで一望。丸山三峰の上でラッセル隊下山。小林・宮本・宮下が唐松岳アタックに変更。稜線に出る登りの雪庇は岩場にピトンを打ちザイル確保で登る。唐松岳頂上着10：45風ひどくガス。下りの岩場はザイル確保。丸山のコルまではアンザイレンして下る。BC着2：40 アタック成功祝いと小林の誕生日を祝った。

清水部長・小林さんの指導で、積雪期の冬山登山ができた。全員丸山の上まで行けたこと、唐松岳アタック、スキー練習、荷物を持ってのスキー滑降などの成果があった。肩を組んで雪を圧縮しその上に炭俵・ペニア板を敷き、木綿のワインパートントを張る。オーバーズポン・オーバーシューズは、緑町の北信帆布でテント地を購入し自分たちで縫った。木綿のヤッケは濡れるとごわごわになり、転ぶと雪だらけになった。皆、親の大反対を押し切っての合宿参加であったが、雪山の厳しさと魅力も満喫した。

○春山合宿（北アルプス八方尾根～唐松岳往復）

冬山合宿に次いで、女子部員だけで、積雪期登山の総合的な基礎訓練、雪中露営、雪洞建設、わかん・ラッセル・アイゼンテクニックの習得、分散行動の訓練をした。

・参加者 L宮下常子 S L宮本範子 中村和美 大塚寿子 津金周子 栗林紀子

・行動記録

3月6日 (雨) 長野～黒菱小屋付近

長野発～黒菱。雨のため雪はしまっていたが、スリップしやすい。上半身はびしょ濡れ、やむなく黒菱に幕営。ラジウスをたいて衣服を干す。CO₂充満のためローソクの火が消え、びっくりして換気。一晩中雨。テントはほかに二張り。

3月7日 (雨) 停滞

雨のため一日停滞。ブリを入れた雑煮の朝食。体調の悪いものがいる。

3月8日 (雨) 停滞

朝食はお汁粉。（宮本が塩を入れてねと言う）夕方、小降りになり風が出てくる。

3月9日 (晴、時々ガス、風強し) かんばまでBCを上げる

朝食（焼き餅）後、テント撤収し皆快調に出発。第一ケルンから上は風が強く、食料の缶を這松の下にデボ。かんば着1：45白馬岳～不帰キレット

がよく見える。積雪70cm。荷物を取りに行き、雪のブロックを積む。夕飯は卵丼。夕焼けはなく、下界は雲海。

3月10日 (晴、曇り、吹雪) 唐松岳アタック

6：15ラッセル隊（宮下・栗林）出発。朝焼け。雲海の上に八方尾根から白馬岳までよく見える。丸山一峰の登りで後発隊と合流して稜線の下の岩場まで固く凍った表面をピッケルでカッティングして登った。宮本・大塚がアタックに行き、他はBCへ。「唐松小屋直下厚さ70cmくらいの雪庇を40cm四方に切って稜線に出る10：10。下から吹き上げる風は冷たくない。がら場の夏道を辿る。頂上直下2か所雪に覆われた斜面をトラバスし、唐松頂上着10：40。立山連峰はガスで、剣岳のみ見える。アイゼン跡を辿って小屋に入り、昼食。帰路が心配で好物の甘納豆も味がしない。小屋直下の稜線ではザイル固定で降りる。視界はだんだん悪くなり、緊張感と恐怖感で体がこわばる。岩場下でザイルを取るころは視界はまったく無くなり、わずかなシュプールと赤旗を頼りに吹きつける雪の中を下る。」（宮本）・大塚の記録よりBC着2：20 アタック成功と栗林の誕生日のパーティ。

3月11日 (吹雪) 停滞

吹雪で停滞。一日暇なので、BCの横に高さ1m、2・3人は寝られる広さの雪洞を作った。ローソクをともすと宮殿のような輝きだ。宮下と宮本が体験のため雪洞に泊まる。

3月12日 (雪、ガス) BC撤収 下山

雪洞の二人は体の上に5cmほど雪が積もって、目を覚ました。衣服もシュラフもびしょ濡れ。4：30からテントの中で、パッキングをして、天候の回復を待つ。8：00ガスが薄れ、小雪になったのでテントを撤収して下山。尾根道は岩が凍って滑りやすい。アイゼンが4個しかなく2名はアイゼンなしで黒菱まで下り、そこからはスキーで降りた。

女子部員だけで積雪期の春山登山ができたことは成果。アタック隊用の赤旗は、もっと必要だった。稜線の凍った雪の斜面の升降の技術訓練、積雪期の岩登りの必要も感じた。6人のパーティで、アイゼン4足、携帯ラジオも、トランシーバーなどもなく、「かん」と経験が頼りの登山成功だった。雪の唐松だけに登りたい気持ちと度胸とチームワークと一年間の積重ねが、成功の基だったと今は思う。夜テントを出るとポールや金具に手が凍りつき、満天の星が手に取れるように降り注ぎ、下界の明かりが見える。ラジウスで雪を解かして凍えた足を暖めたこともあった。私たちの「星の時間」だった。

(宮下 常子 記)